
令嬢と令息の憂鬱

原坂秋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

令嬢と令息の憂鬱

【Nコード】

N7485R

【作者名】

原坂秋

【あらすじ】

メフィス伯爵令嬢のローズは、ウォルツ伯爵家の舞踏会でウォルツ伯爵令息のリジンにダンスを申し込まれた。彼と踊ったその日、リジンの兄が夜這いを仕掛けてきて……。 「お嬢様と侍女の憂鬱」のルーシヤンの姉、ローズの物語。

伯爵家の舞踏会

高級な音色が、大広間を覆い尽くす。音色に合わせて踏まれるステップの音は揃っていて、まるで手拍子のよう。

ざわめく話し声の半分は自慢話で、もう半分は嫌味の混ざったお世辞だろう。

曲の終了でダンスを止め、ローズはその場から移動した。そんな時、誰かがローズの前に立つ。

「一曲踊って下さいませんか？レディ・ローズ」

ウォルツ伯爵邸で行われた、舞踏会の途中だった。ウォルツ伯爵の舞踏会に来たのは初めてでなく、もう慣れたと言っても過言ではない。

息子のいないメフィス伯爵の長女であるローズは、どんな舞踏会、夜会に言っても話し掛けられ、ダンスに誘われる。誘う人は皆、自分ではなく、自分と結婚した後に得られるメフィス伯爵位を見ているのだとローズは知っていた。

だから一曲だけ踊り、すぐにその人から離れるようにしている。

彼女の両親は嫌なら断れと言ってくれるが、心優しいと評判のローズには、誘ってくる男性を無視できない。

「喜んでお受けしますわ、リジン様」

ローズは美しい笑みを浮かべて、差し出された手に自らの手を乗せた。

たとえローズが、嫌ならば断ることを主義としていても今回は断れなかっただろう。何せ、ローズをダンスに誘ったのは、舞踏会の主催者でもあるウォルツ伯爵の嫡男なのだから。

メフィス伯爵家出身のシンシアが、正妃から第二王妃に移ってしばらく。新たに正妃の座に収まったミーユの出身であるヒルドマン侯爵家と、メフィス伯爵家の仲はすでに険悪になっている。

メフィス伯爵はヒルドマン侯爵家だけでなく、ヒルドマン侯爵家と仲の良い貴族をも避けていた。貴族が二分していくのは早く、ウォルツ伯爵はメフィス伯爵派の貴族だった。

ウォルツ伯爵は中でも高い権力を誇り、長男のユリスとローズの縁談の噂も流れるほどだった。

だから正直、ローズはウォルツ伯爵主催の舞踏会に参加するのに、乗り気にはなれなかった。

「楽しんでおられますか」

ローズと共に簡単なリズムに合わせてステップを踏むのは、ウォルツ伯爵の次男坊。

「ええ……はい。とても」

ローズの表情を見て、彼女が楽しんでいないと思う者はいないだろう。ローズは実に楽しそうな表情をしており、実際にそれは嘘のものではない。

「メフィス伯爵家の女性は美しいと有名ですからね。華やかな容姿と女性らしい温かな心を兼ね備えていると聞きます」

有名になるほどの美形ではないけれど、リジンは十分に整った容姿をしている。彼が目を細めてローズを見つめる表情はとても優げだ。

「まあ。ありがとうございます。妹に比べて地味な容姿だと思っておりましてので、とても嬉しいですわ」

「妹……ルーシャン嬢、でしたか」

まだデビューすらしていない、ローズの妹の名をリジンは迷わずに言い当てた。

「ええ。よくご存知ですね」

「私達の間では評判ですから。まるで天使のような姉妹だと」

天使って……。

ローズの苦笑に、リジンもわずかに頬を緩める。

曲がクライマックスを迎え、静かに終わっていく。

頭を下げて離れようとしたローズを、リジンが呼び止めた。

「レディ。失礼ですが、王城の舞踏会には参加されますか？」

この方も、参加されるのね。

ローズは、それこそ天使のような表情で頷いた。

「はい。参加する予定です」

「それはよかった。——本日は、こちらに滞在されるのですよね？
ご自分の屋敷だと思ってくつろいで下さい」

ローズは始終笑みを浮かべ続けていた。

——ローズ嬢なら最高、ルーシヤン嬢なら及第点。

それは、リジンの兄、ユリスの口癖だった。ユリスはメフィス伯爵位を狙っていて、リジンに協力を求めている。

「既成事実を作ろうと思う」

舞踏会は、日にちが変わってからしばらく経った時によく終わった。ほとんどの招待客は帰ったが、メフィス伯爵はウォルツ伯爵と話があるとのことで、屋敷に泊まるらしい。

皆が寝静まったと思われる頃、リジンの部屋を訪ねたユリスが開口一番そんなことをいった。

「……私と？」

冗談のつもりで言ったのだが、ユリスは真面目な表情でリジンを見んだ。リジンは声を出さずに笑い、肩を竦めた。

「——止めなよ。紳士的じゃない」

強気な兄と違って、リジンはむしろ押しの弱い性格だった。そのせいで、兄には良いように使われている。

それなのに、リジンは兄のことを厭う様子を見せずに兄弟仲は良いほうだった。ウォルツ伯爵邸で働く使用人は皆それを不思議に思っている、最終的にリジン様が優しいのだろう、と結論付ける。

だからだろうか。社交界でも、リジンは優しく怒らない、との噂が立っている。

リジンとしては、自分は怒らないのではなく、そう怒るようなことがないだけなのだが——やはり心は狭くないのだ。

「それに、彼女が相手じゃ、誰もそんなことを信じない。ローズ嬢は、雰囲気流されたりしない」

いつになく強気な弟に、ユリスは笑った。

「なんだ？ お前もメフィス伯爵位が惜しくなったか？」

「そうじゃないさ」

「大丈夫に決まってるだろ？ どんな女だって、快楽を知れば大人しくなる」

下品な笑いを漏らすユリスから目を逸らし、リジンはため息をついた。兄のこんな笑い方にも、褒められたものではない話にも慣れていた。特に嫌悪感を抱くことはないし、黙ってくれと怒鳴り付けるつもりもない。

ただ——、あの清らかな、まるで人形のように一定の笑みを保ち続けていた少女がユリスのものになることに、何とも言えぬ違和感を感じていた。

「リジン？」

「……弟になったら、ローズ嬢は私ともう一度踊ってくれるかな」

ローズとは、一度しか踊れない。それは暗黙の了解として独身貴族男性の中で流れていることだ。何でも、しつこくダンスに誘った者は、彼女を溺愛しているメフィス伯爵に潰されるのだとか。

そんなことを思えば、ユリスは鷹揚に頷いてみせた。

「当然だ！ いくらでも踊ってもらえ」

明日からローズ嬢はお前の義姉だ、と言うと、ユリスは立ち上がった。

——え、既成事実を作るって、今日？

リジンの驚きに気付かないまま、ユリスは部屋を出ていった。客室で寝ているのだろう、ローズに会いに行くのだ。

「ご安心下さいローズお嬢様。少しでも物音がすれば、私、相手を殺める覚悟でお助けします」

ローズの一番の侍女であるエリザは、ローズの手を強く握ってそう言った。

本来ならば使用人用の部屋で眠らなくてはいけないエリザだったが、ローズを一人で部屋に置いていく危うさを強く主張し、メフィス伯爵にローズの隣の部屋を借りる許可をもらったのだ。

これまでに既成事実を作ろうと夜這いしてきた人達のことを考えれば、ローズとしても必要ないと言い切れない。

「エリザったら……殺めてはだめよ？」

「ああいう輩は、一度痛い目にあわせないと駄目なんですよ」

ああいう輩……というのは、爵位だけを狙ってローズの部屋に来た者だということは、ローズにも理解できる。

「そんなに、伯爵位がほしいのかしら？ 貴族というのも大変ね」

疲れたような主人が、自分の魅力に気が付いていないのが、エリザの今現在の最大の悩みだと、ローズは一生知ることがない。

何度も何度も念を押すと、エリザはやっとローズの部屋から出た。エリザが隣の部屋に入ったことを確認して、ローズは迷わず窓のカーテンを開き、窓の鍵を開けると外へ出た。

ローズの与えられた部屋は一階で、薄手のネグリジェを着たローズには軽々と越えることができた。地面に足を付けると夜風で冷えきっており、体温を奪われる。

一度でも冷たいな、と思うと、いきなり夜風に意識が向く。カーディガンを羽織ればよかった、といまさらながらにそう後悔した。それでも……寒さや冷たさを我慢してでも、観察する価値がそこにはあった。

庭園だ。

ウォルツ伯爵邸の庭園は有名で、優しい美しさがあると評判である。

舞踏会の開かれる大広間に向かう時にローズも見したが、その評判に偽りは無い。一瞬で分かる華美さはないものの、見る者を心地良くしてくれる。

真つ暗闇の庭園を裸足で歩き回り、ローズは唇を綻ばせる。自分がウォルツ伯爵邸に行くと言った時の妹を思い出した。

絶対に庭園を見て、どんなものか教えて下さい、と妹のルーシャンは言っていた。

——あの子も、花が好きよね。

なんて、思っていたら。

「……レディ？」

自分の部屋近くにしようと決めていたのに。

いつのまにかローズは、リジンの部屋の前まで来ていたらしい。

「……レディ？」

窓を開けて呟いてから、リジンはそんなわけではない、と思い直した。

だって……今ローズは、ユリスに抱かれているはずなのだから。

——だったら、そこにいるのは誰？

長い髪を解き放ち、薄く身軽な格好をしている。

そこにいる女性を見つめ、やはりローズ嬢ではない、とリジンは結論づけた。ローズはあんな格好で外を出歩いたりしないだろう。

あんな薄着で部屋の窓の近くに立っているなんて、それこそ誘っているとは思えない。

寝よう、と窓を閉めようとすると、

「リジン様……？」

発せられた声に、リジンはピタリと動きを止めた。

それは——踊った時に聞いた、ローズの声そのものなのだ。

「レディ・ローズ？」

驚いたことに、深夜（いや、早朝と言ってもいいかもしれない）の庭園に立っていたのは確かにローズだった。

「何をしているのですか、そんな場所で！」

窓から身を乗り出し、ローズのもとに行こうとしたリジンだった

が、彼女がわずかに震えていることに気が付いた。

寒い季節でもないが、今は夜だ。あのような薄着で、寒くないはずがない。

……どうして上着を着てらっしゃらないんだ。

ひどく無防備な彼女に苛立って、リジンは乱暴な動作で自分の上着を掴んだ。

ローズはリジンが窓を越えて自分の前に来るのを、何も言わずに見つめていた。

「レディ・ローズ。どうぞ。羽織って下さい」

「あ……ありがとうございます。少し肌寒さを感じていたので、助かりました」

少し肌寒さを感じていた、という唇は真っ青になっている。

「少して、そんなわけないでしょう……」

ゆっくりと指で唇に触れる。柔らかな弾力があり、温かい。

「こんなに唇を青くして」

それもこんな薄着で、とローズの服を見たリジンは、彼女が着ているのがネグリジェだと分かって言葉を失った。

「レディ……」

「私、部屋に戻りますね。お手数をおかけして、申し訳ないことをしました」

リジンから逃れるように、ローズは素早くその場から移動した。彼女の唇に触れていた指先が温もりを失い、冷たくなる。

「レディ・ローズ！」

ローズを追おうとリジンが手を伸ばした時。

「無礼者！！」

リジンの知らない声が屋敷中に響き渡った。
前を小走りで進んでいたローズも立ち止まっている。

「エリザ……っ」

ポツリと女性の名を呟くと、ローズは小走りを再開させた。

「あ、レディ？」

エリザとは、声の主だろうか。

リジンはそのまま、ローズを追った。

エリザ、エリザ、エリザ——！

無礼者。そう叫ぶ声は、間違いなくローズの侍女のものだった。

エリザは一生変わらぬ忠誠をローズに誓っており、それは破られたことがない。

たとえ自分の部屋に知らぬ男が入ってきたとしても、エリザは大声を上げないだろう。横の部屋には主が眠っているのだから。主の眠りの妨げになってしまう。

エリザがあのよう大声で叫ぶ理由など、一つしかない。

「エリザ……！」

いつの間にこんなにも移動していたのか。花壇に沿うように走り、自分が借りたと思われる客室に着いた時には、すっかり息が上がっていた。

胸の奥が熱い。ドンドンと鼓動が激しく打つ。

「エリザ！」

「え……ローズお嬢様」

開け放たれた窓を通して、ローズの声は無事に部屋に届いたらしい。エリザが顔を覗かせ、ローズを見て目を丸くした。

「そのような格好で……！何をしてらっしゃるのです、早く部屋にお入り下さい」

言ってから、エリザはローズと窓と、それから部屋の中を見て困り果てた顔をした。主人に窓を跨がせるわけにもいかないが、この場を離れるわけにも行かない、といった顔だ。

「大丈夫ですよ」

「っ……きゃ!？」

突然、膝裏と腰に手をあてられてローズは悲鳴を上げた。視界が反転し、気がつけば目の前にはリジンがいる。

自分の置かれている状況が分からずにエリザを見れば、彼女も目を白黒させてローズ達を見ていた。

「ちょっと、そこをどいてくれるかい？君の主人を運ばなければいけないから」

「は……はい」

抱き上げられている間は、ひどい不安感に支配されていた。彼が手を離せば、ローズは地面に落ちるのだ。不安定で怖くて、顔を強張らせたローズを見てリジンがクスリと笑った。

「……」

「ああ失礼。貴女はどの表情をしても美しいのだと再認識してしまいました」

リジン様は、噂よりも意地悪ですわ、と。ローズに彼女の妹と同じくらいの強さがあればそう答えていただろう。

ローズを抱えたまま窓を跨ぎ、リジンはまるで壊れ物を扱うようにローズを絨毯の上に乗せた。

「リジン……お前」

そして、ローズの聞き慣れない——そしてリジンにとって毎日聞いている声がした。

客室のベッドに座り、ふて腐れるように半眼でリジンを睨むのはユリスだ。

エリザがローズに縋るように抱き着いて、ユリスを指差した。

「ローズお嬢様！あの方が忍んでこの部屋に入って来たのです」

「ええ」

本当言えば、来るだろうな、とローズは予想していた。ただ、ユリスではなくリジンが来ると思っていたから、そこだけが意外だった。

「すぐに旦那様がいらっしやいますわ。相応の報いを受けていただかねば」

エリザに睨みつけられたユリスは、同じように彼女を睨みつけてから鼻を鳴らした。

エリザの叫びの甲斐もあり、人はすぐに集まった。

まずは屋敷の侍女長が。メイドが。ウォルツ伯爵夫妻が。そして最後に、メフィス伯爵夫妻が来る。

「何があった？エリザ」

メフィス伯爵は、その場にいる誰よりも先にエリザを見た。

リジンとユリスが少し驚いた表情を浮かべたのを、ローズは見つける。

「こちらの、ユリス様が夜中にローズお嬢様の部屋に忍び込んできたのです」

エリザの告発には、一切の容赦がなかった。

ローズが絡むと、エリザは残酷なほどに正義を求める。これがエリザでない他の誰かだったなら、エリザはここまで容赦なく告発しなかっただろう。

「ほう？」

メフィス伯爵の視線を受け、ユリスは困ったような表情を浮かべた。

「誤解です、メフィス伯爵」

「誤解？」

「ええ。偶然部屋の前を歩いたのを勘違いしたのでしょ」

言い訳って、皆同じことを言うのね。

感心に似たような気持ちで、ローズはユリスを見た。

これまで夜中にローズの部屋へ来て、そしてエリザに見つかり告発された貴族の子息は皆誤解だと伯爵に訴えた。

エリザの勘違いである、というのが一番多かったが、悪い時などは、ローズから誘ってきたなどと言う者もいた。

それを考えれば、ユリスはまだ紳士的なかもしれない。

「——ウォルツ伯爵」

不意に、メフィス伯爵は真っ青になってユリスを見るウォルツ伯爵に声をかけた。寄り添っていた夫妻はビクリと肩を揺らす。

「は、伯爵。我が息子よりも使用人を信じるのですか？」

そう言う彼らも、自分達の息子の言葉を信じていないようだった。必死に平静を装いつつも、ユリスへの苛立ちを隠せていない。

「そんなこと……当然だろう、伯爵？」

「え——」

「エリザはミュール家だ。ローズに関しては、エリザに一任している」

その言葉に、エリザは表情を曇らせた。

「ではウォルツ伯爵。今回の話はなかったことに」

妻の腰を抱いて、メフィス伯爵は部屋を出た。

今回の話というものがどういうものかはローズには分からなかったが、それは大事なものだっらしく、残されたウォルツ伯爵夫妻の顔に血の気はない。

「ユリス。来なさい」

細い声で命じられ、ユリスもどこかぼんやりとした態度でそれに従う。

カチャリと扉が閉まれば、いつの間にか野次馬だった使用人達も消えており、ローズとエリザ、それからリジンだけになっていた。

「……ローズお嬢様」

不安そうな声音だった。怯えるような表情を浮かべ、エリザが俯く。

「——もしも一家で自殺でもされたら、どうしましょう」

確かに、ウォルツ伯爵の嘆き方はそれが心配されるほどのものだった。

「大丈夫でしょう、きっと」

「そう……でしょうか」

「心配？」

「心配というか……後味が悪いです」

葬式に通じる暗さがあった。

確かに、あの様子で出ていかれるのは後味が悪いだろう。

エリザは毎回、事が終わってから不安になっていた。

ローズの敵を告発し、相手が断罪されると相手に対して不安と罪

悪感を抱く。

エリザの瞳に、許可を求めるような色を感じてローズは頷いた。

「行ってらっしゃい、エリザ」

「……っ、すみません!」

エリザはローズに頭を下げ、ダツと駆け出した。
それを見送り、さて寝ようかと伸びをすると。

「どこに行ったのです?」

「っえ!」

当然のようにリジンがベッド脇に立っているものだから、驚いて
ローズは目を丸くした。

「リ——リジン様。いらっしゃったのですか」

ウォルツ伯爵と共に部屋に戻ったのかと思っていた。

リジンはローズに質問の答えを求めているらしく、何も言わずに
彼女を見ている。

「……お父様のもとですわ。罰の軽減を求めるのでしょうか」

「自分が摘発したのに?」

「ええ。毎回のことです」

エリザは優しいな、とローズは思う。世間では「優しい」と評判
のローズだが、自分よりよほどエリザのほうが優しいのではないだ
ろうか。

「それは——お優しいことですね」

何か含むところのあるリジンの言い方に、ローズは眉をひそめた。

「どのような意味でしょう？」

「いえ、深い意味はありませんよ、レディ。ただ……考えが甘いな
と思ひまして」

考えが甘い？

その言い方は、ローズに強い怒りをもたらすほどではなかったものの、十分に彼女を不愉快にすることはできた。

「ご忠告、恐れ入りますわ」

話を切り上げて部屋に戻ってもらいたい。早くエリザは戻ってこないだろうか？

「貴女は、全く分かっていらっしやらない。……例えば今ここで、」

穏やかな表情を浮かべているリジン。その表情に恐怖を感じず、ローズはリジンが近づいてきてもそれを拒否することはしなかった。

「私が貴女の唇を奪えば、どうなさるおつもりですか？」

顎を、指で優しく上げられる。リジンを見上げる形となったローズは、ゆっくりと近づいてくるリジンの顔を不安げに見つめていた。ふわりと温かなリジンの唇が、自分のそれに重なった瞬間に、ローズはリジンを全力で押し退けた。

「な……何を」

「私が兄でしたら、ここで終わらなかったと思いますよ？」

ローズは、自分の目尻に涙が溜まるのを感じた。ツンと鼻の奥が痛くなる。

「未遂だっただけで、あの使用人がいなければ貴女は犯されていたのです。どうか用心してください」

——初めてだったのに。

ローズはリジンの話を半分も聞かず、何度も頷いた。

リジンは一通り忠告を終えると、俯くローズの髪に触れた。背中を覆うピンクブロンドの髪は、社交界でも有名だ。

リジンの指先が髪に触れた途端、ローズはビクリと身体を震わせ、リジンから離れる。そんな分かりやすい態度に苦笑して、リジンは扉に向かった。

「では、お気をつけください」

「……ご忠告、痛み入りますわ」

静まらない混乱を伯爵令嬢の誇りで押し止め、ローズは頭を下げた。

結局、エリザがローズの部屋に戻ってきたのはリジンが部屋から出てからしばらくしたところだった。

ローズは唇に手を当てて茫然と空間を見つめている。そんなローズにエリザは一瞬動きを止めて、怖ず怖ずと近寄った。

「あ、あの……。ローズ様、どうかなさいましたか？」

「エリザ。——私達、考え方が甘かったのかもしれないわ」

「はい？」

エリザはキョトンと主を見る。

「ううん。……何でもないの。もう遅いわ。今日は一緒に寝ましよう？」

エリザの従姉妹の、リドニアだったならとんでもない！と断っていたことだろう。しかしエリザはリドニアよりもそういう点では寛容であり、ローズに「昔は一緒に寝ていたでしょう？」と言われれば断れない。

「は……はい」

微笑むローズに、エリザは不審気に首を捻った。何だか……、いつもと何かが違う気がする。

とは言え、ローズは完璧に笑っており、エリザは違和感を指摘できなかった。

ただ、ベッドの毛布をめくる時やカーテンを閉める時の動作が荒っぽいような。

「あ」

ベッドの中で、ローズは声を上げた。

「どうなさいましたか？」

「リジン様に、上着を返しそびれたわ」

ローズを抱き上げて部屋に入ってきた青年を思いだし、エリザは顔をしかめた。

あの時、二人がお似合いでまるで一枚の絵のように見えたから呆けてしまったが、エリザとしては捨て置けない大事件である。

「エリザが行った後に返せばよかったわね」

「……え？」

「え？」

——私が行った後？

あの時、自分とローズ以外に誰かいたのだろうか。

「あの、ローズお嬢様？私が出て行った時……もしかして、リジン様が……？」

「いたわ。誰もいないと思ってたから、私もビックリしちゃって」

その後のことを思い出してローズは赤くなったり青くなったり……。

エリザも、自分が出て行ったことで妙齡の男女を二人きりにしてしまったことを知って青くなった。

令嬢の変化

「お姉様？お姉様ったら！」

妹に纏わり付かれ、ローズは我に返った。

「どうしたの、ルーちゃん？」

ウォルツ伯爵邸での舞踏会が終わって数日。ローズはボウツとしている時が多くなった。それは、常にローズの一番近くにいるエリザだけでなく、ローズの妹のルーシャン、果ては、ルーシャンの侍女のリドニアにまで伝わっているようだった。

「ねえ……エリザ。ローズ様、どうかなさったの？」

ローズ主催の、無礼講・ティーパーティーの途中だった。侍女や主など関係なく好きに話そう、という趣旨で開かれているティーパーティーだが、ここ最近ローズが相槌すら打たないくらいにボンヤリとしている。

普段からそう饒舌なほうでもなかったが、最近は異常だと皆が思っていた。

ユリス様の件かしら、とエリザは考えているが、ああいったことは今回が初めてではない。

「一応、見当はついているわ」

心配する従姉妹にはそう答える。リドニアはルーシャンの唯一の

侍女だ。一人で全てをこなすリドニアに対し、大人数でローズに仕えるエリザがリドニアに心配されるのは、何とも情けない話である。

「なら、いいけど」

リドニアも、無理にローズの世話を焼こうとは思わないらしく、肩を竦めて話を止めた。

それに実際、エリザはローズがおかしくなった原因に見当をつけている。

もしもおかしくなった原因にユリスが無関係ならば、残る候補はただ一つ。

——リジン様と何かあったのかしら……？

思い出すのは、真夜中での口づけ。

気分が高揚するわけでもなく、憤慨するわけでもなく。

ただボンヤリと思い出し、意識は全てそちらにいく。いつの間にか時間は過ぎて、気付けばその日は終わっている。

忠告でキスをするリジンも変だと思ったが、それを何度も思い出す自分も相当変だという自覚はあった。

「リジン様ですか」

「……！」

唐突すぎるエリザの言葉に、ローズは飛び上がった。あまりに挙動不審な態度にエリザが自分の推測に確信を持ったことにも気付かず、ローズは作り笑いを浮かべてエリザを見た。普段の笑顔が自然

な分、彼女の意識した作り笑いは分かりやすく不自然だった。

「え……えーと、エリザ？リジン様がどうかしたの？」

「どうかしたの、は私の台詞です。ローズお嬢様は、あの日から変です」

「そんなこと……」

「あります」

自信満々にある、と言われれば、ローズもそれに反論することはできなかった。彼女も、全くの無自覚ではないのだ。

気付けば、あの夜のことを思い出している。

「何かされたのですか、リジン様に」

されたかされていないのか、と尋ねられれば、確実に「された」だろう。しかし、ローズは首を横に振った。

「何でもないのよ、本当に」

歳の近いエリザに詳細を言うのが恥ずかしかった、というのはもちろんある。

ただ、それ以外にも理由はあるようにローズには感じられた。

それを言葉にはできなかったが――。

王都でも有名な仕立屋。王城で行われるダンスのため、仕立屋を屋敷に呼んだ。彼女に採寸をされている間、ローズは自分のそばに

控える侍女がエリザでないことに気が付いた。

「あら……？　ねえ、エリザは？」

声をかけられた侍女は、普段あまり話すことのできない主に話し掛けられて嬉しいらしい。にっこりと笑って直ぐさま教えてくれた。

「エリザさんなら、ウォルツ伯爵邸に行かれました。何でも急用なのとか」

……ウォルツ伯爵邸！？

顔が強張るのが自分でも分かる。どうしてエリザはそんなところへ行ったのか。

いや、理由は分かる。

ローズがここのおかしいのを、リジンの仕業だと確信したからだろう。

「——急用？」

「ええ。……申し訳ありません、詳しくは聞いていないのです」

侍女は恐縮するように声を弱めていく。怖がらせたかしら、と思いい、ローズは笑って首を振った。

「いいのよ」

腕、胸周り、腰周り……と細かく計っていき、ようやく採寸が終わると、劳いの言葉を早口に言って、ローズは早々に仕立屋を帰らせた。

部屋に戻ろうと、廊下を歩いていたときのこと。

「ローズお嬢様。顔色が優れないようですが……休まれますか」

すれ違いざまに、執事のルドルフが足を止めて心配そうにローズを見た。

「休まないわ。大丈夫よ。それよりルドルフ……、私って、最近から変になった？」

「変と言いますか。頻繁に、何かを考え込んでいることが多くなっただとは思いますが」

ルドルフはハッキリと言いきった。

「今は何も起こっておりませんが、それが原因で何か事故が起こるということも有り得ます。原因に思い当たるところがおありなら、解決を急いだほうがよいかと」

解決。原因は思い当たっていたが、解決策などは何もない。困ったような顔のローズにルドルフが気遣わしげな顔をする。

「ローズお嬢さ——」

「失礼します、ローズお嬢様」

タタツと小走りで廊下を進んできたメイド。素知らぬ顔をしてその場から去ってしまいたい気持ちを抑えつけて、ローズはその場に留まった。

「ローズお嬢様に、お客様ですわ。ウォルツ伯爵令息、リジン様です」

ルドルフが表情を変えずに驚くのを察しながら、エリザは分かり

ました、と頷いた。

……天使の唇は柔らかく、温かった。

口づけるつもりはなかった。少しキツく忠告して、彼女に用心を強めてほしただけだった。

周囲が呆れるほどに自意識過剰に自分を守り、既成事実や夜這いなど愚かなことを考える男を作らないようにしてほしい。

あの一瞬で、それ全てを考えたわけではないだろう。事後に考えた、リジンの精一杯の言い訳だ。

それでも、口づけるつもりでローズの部屋に残ったわけではなかったし、部屋に戻った後は罪悪感に耐え切れなくなった。

「リジン。いいか？」

メフィス伯爵が帰った後、ウォルツ伯爵家の者は皆寝不足のようだった。今日は予定もなかったので、リジンはもう一眠りしようかと思ったのだが。

「兄さん」

兄の、ユリスがリジンを呼び止めた。神妙な顔をしている。そんな兄に「眠いから」などという理由で断れないのを悟って、リジンは頷いた。

ユリスはリジンを誘導するように歩き、自分の部屋の前で足を止めた。

「ほら。入れ」

「ん……うん」

部屋に入ると、ユリスは乱暴な動作でベッドに腰掛けた。視線で自分も座るよう促され、リジンもユリスの隣に座る。

「……エリザとかいう侍女のおかげで、直接的な報復はない、らしい」

「報復って……」

ユリスの言葉に、リジンは苦笑した。報復と言うか……。それに見合うことをしたのはユリス本人だ。

「エリザは本当に伯爵に進言したんだ」

驚きと感心からの言葉だったのだが、ユリスは不機嫌そうに眉を寄せた。

「ミュールだろ？」

「らしいね」

ミュール家は、代々メフィス伯爵家に仕えている使用人の家系だ。絶対の忠誠を誓う代わりに絶対的な信頼を得ているのだとか。ミュール家は貴族の中でも有名だった。

「ま、あいつは本家じゃないらしいが」

ユリスの小声に、リジンは意外な思いで兄を見た。ユリスもすぐに視線に気付き、リジンを見返す。

「何だよ」

「あの後、エリザと会ったの？」

「別に……」

「会ったんだ」

到底気が合うとは思えない二人の会話を聞いてみたかった。少し残念な思いを感じながらも、自分がその時何をしていたのかを考えれば、リジンのそんな思いは吹き飛んだ。

「それより！まだあの話は終わってないんだよ。直接的な報復はないらしい——が、夜に父上とメフィス伯爵の間で交わされた約束は破棄されるらしい」

無かったことに、とメフィス伯爵が言い捨てたことだろう。

「多分……ローズ嬢が絡んでんじゃないかと推測してるんだ」

「彼女が？」

ローズが絡むとしたら、約束の内容など限りなく狭まり、推測に難くない。

——結婚話だ。

「いや、確信も裏付けもないが……」

ユリスはそう言うが、それは丸きり考えられないことではなかった。リジンも段々と、そうだろうなと思いはじめていた。

「ま、内容がどうであれ破棄されたんだ。推測が当たってようがはずれてようが変わらねえよ」

「それもそうだね」

ユリスは大きな欠伸をし、リジンもそれにつられた。どちらからともなく二度寝しよう、ということになる。

「——兄さん。あの……怒ってない？」

「怒る？何を？」

舞踏会の夜のことだ。ユリスがローズの部屋にきた時、ローズはリジンと共にいた。

そのことを話せば、ユリスは苦笑した。

「結果は変わってなかったと思うけどな。……お前も狙ってるなら、譲ってやるよ」

クスクスと笑うユリスに、何となく同調するような笑みを見せ、リジンは兄の部屋を出た。

舞踏会からしばらく。時間は、何の支障もなく進んでいった。ユリスは何事もなかったかのように振る舞っていて、ウォルツ伯爵夫妻も表向きは穏やかに過ごしている。

「……ん」

兄弟で仲良くだらけていると、ユリスがつまらなさそうに読んでいた本のページをめくる手を止めた。

ユリスと比べれば真剣に読書を楽しんでいたリジンは、ユリスの声に顔を上げた。

「……どうかした？」

「いや——」

ユリスは窓の外を見ている。何かあるのかとリジンも身を乗り出そうとしたのだが、それをする前にユリスが立ち上がった。

「ちょっと行ってくる」

「え？ うん」

何があったのかと窓の外を見たが、特に珍しいものは見つからなかった。

そのまま本を読み進め、再びリジンが顔を上げたのは、扉が叩かれた時だ。

ユリスが部屋を出てからしばらく経った頃だった。

「リジン。お前に客だ」

「——客？」

誰だろう？

客と言われて思い当たる人はいない。かろうじて思い当たった少女は、ここに来るはずがない。

立ち上がり、扉の前に立てばちょうどよく扉が開いた。

「エリザ……」

ユリスの斜め後ろに立ち、完璧なお辞儀を見せたのは。
ローズの侍女、エリザ。

エリザが大人しく振る舞っていたのは、その時だけだった。にっこりと微笑んだまま、彼女は強引に部屋へ入ってきた。

何となく雰囲気圧倒されてしまい、リジンは一歩下がってそれを許してしまう。部屋の主でもあるユリスは何とも言えない表情を浮かべてエリザの後に続く。

「——リジン様」

「は、はいっ？」

生まれてから今までで、一番怖い視線を向けられている。

絶対に直視しまいとエリザから目を逸らして、リジンは彼女にソファに座るよう勧めた。

リジンはエリザと向かい合う位置に座り、ユリスは壁に背中をつけてニヤニヤと笑っている。

彼女……エリザが何に怒っているのかは、容易に想像ができた。ローズから聞いたのだろう。

「ローズお嬢様が、変なのです」

「……………は？」

へん……変？

頭の中で変換が遅れた。もっと直接的に言われるかと思っていたのだ。エリザが全てを知っていると仮定すると、ずいぶんと婉曲な表現を使う。

——もしかして。

「エリザ。君はその……何も知らない？」

「な、もしかして！」

リジンの言葉に、エリザは真っ青になってうろたえた。その驚き

ようにこちらまで怯んでしまう。

「貴方、ローズお嬢様に……！」

「……え？あの、何か思い違いを、」

「問答無用ーっ！！」

「ひっ！」

自分よりも年下の少女に詰め寄られ、反撃もできずに押されっぱなしになっているリジンをユリスは腹を抱えて笑っていた。

「待て！誤解だからほんとにっ！」

「誤解なわけないでしょう！」

敵意剥き出しのエリザをなだめ、リジンは溜め息をつく。エリザは話を聞かないし、ユリスは笑っているだけで何もしないし……。

どうして話を聞かないんだ。

心の中でうなだれた。

リジンが短気な性格ならば、自分の非を棚に上げて怒り返していただろうが——悲しいかな、リジンは短気ではなかった。むしろ気の長いほうだ。

しつこいくらいに否定し続けると、やっとエリザはふむ、と頷いてくれた。

「つまり。リジン様とローズお嬢様は、その……そういう関係になっっていないのですね？」

「さっきから何度もそう言って……」

「分かりました。何もないのですね？お嬢様のことは周囲の勘違いか、もしくはリジン様とは全く関係のないことが原因なのだと。つまりそういうことですね」

「……」

全く何もなかったわけでは……、ない。
お時間を取らせて、申し訳ありませんでした。そう言って立ち上がるエリザの腕を、リジンの手が掴んだ。

「何でしょう？」

「……レディ・ローズがおかしくなった原因に、心当たりがある」

心当たりというか、もはや確信に近い。

エリザは眉を上げ、リジンを睨みつけた。

「今から、メフィス伯爵邸に戻るのなら、私も行くよ。レディ・ローズと話がしたい」

エリザは疑う気満々の表情で、舐めるようにリジンを見たが――
最終的には頷いた。

「いいでしょう。……行きますよ」

エリザは徒歩で来ていたので、ウォルツ伯爵家の馬車を使用することになった。召使を御者台に座らせていると、始終笑いっぱなしだったユリスが「よう！」と現れた。

「……お前も災難だったな」

「本当にね」

「実際のところ、何したんだよ、ローズ嬢に」

……また笑ってる。他人事だと思って！
嫌な笑いを浮かべる兄に、リジンは頬を引きつらせて言った。

「――忠告しただけ」

じゃあな、と手を振るユリスに見送られてしばらく。とうとう馬車はメフィス伯爵邸に到着してしまった。無言を貫いていたエリザが先に降り、リジンにジッと見る。

「……仲がよろしいですね」

「え、仲？」

「ユリス様と。もっと陰悪な雰囲気だと思っておりました」

「はあ……」

こちらです、と案内する様子は、まるで屋敷の女主人のように堂々としている。

舞踏会や夜会以外の用事で、この屋敷に来るのは初めてだった。こんな用事でなければ、もっと楽しめていたことだろう。今この状態では庭園の素晴らしさも、趣味のよい屋敷の内装にも目は向かなかった。

「あら？」

「――うん？」

少女の声が聞こえたと思ってそちらを見れば、確かにそこには少女が二人いる。

片方はローズと同じお仕着せを着ていて、一目で侍女だと分かった。リジンを見て、深々と頭を下げている
そしてもう片方は。

「ルーシャン様！どうかなさいましたか？」

……やはり、ルーシャン嬢か。

長い、ウェーブのかかった金髪。特徴からしても、ローズの妹、ルーシャンだと察せられた。

「エリザ。そちら、どなた？」

「お客様ですか？」

伯爵令嬢なのに、侍女が一人しかないのか？

トリジンが彼女達を観察していると、エリザの「ええ」という声。

「こちら、ウォルツ伯爵令息リジン様——ローズお嬢様のお客様です。リドニア。ローズお嬢様を客室へお連れして」

「……分かりました」

そんなのメイドに任せちゃえばいいわよ、とか何とか話し合いながら彼女達は去っていく。

「失礼しました。あちらがローズお嬢様のご姉妹であらせられます、ルーシャン様です」

「可愛い方だね。天使のようだ」

「そうですね」

止めていた足を動かす。屋内での車の必要性を感じてしまうほど、屋敷は広く廊下は長い。

「ルーシャン殿の侍女は、一人だけなのか？」

「ええ。……彼女は……」

エリザの歩く速度が落ちた。

何か考え事でもしているのだろうか。人は、考え事をするとき歩くスピードが鈍るという。

「彼女はミュールです。私の従姉妹でもある……本家の長女」

「へえ……だから、伯爵令嬢だというのにあの侍女しか置かないのか」

「というより、ルーシャン様が、彼女しか受け入れないのです」

ミュール家は凄いな。

そう言ってリジンが笑えば、エリザも頬を緩めた。

「こちらです」

そう言って通された客室は、ウォルツ伯爵邸のものと何ら変わらぬ広さだった。ソファに腰掛けると、エリザは壁に沿うように立つ。ローズが来るまでの時間は、何ともいたたまれない気分だった。何を話そう？ 謝るべき？ 怒ってるかな？ 面会謝絶されたらどうする？

後方に立つエリザには見つからないようにしたが、正直帰りたくなかった。

キスしたことがばれたら、エリザに殺されるかもしれない。

……いや、きっと殺される！

コンコンッ

「――失礼いたします」

ローズの登場に、リジンは安心したような困ったような表情を浮かべた。その表情は彼の心情を如実に表している。

「お待たせして、申し訳ありません」

「いえ」

立ち上がり、近付くとローズは目に見えて怯えた。

「舞踏会ぶりですね、レディ」

手の甲にキスをする。

「ええ、そうですね……リジン様。本日は、こういったご用件でしよう？」

――先ほどの緊張や、恐れ、居心地の悪い気持ちはなくなっていた。理由は分からない。

エリザが後ろに控えているのも忘れ、ローズが前のソファに座ったのを確認すると、リジンはすぐさま話を切り出した。

「舞踏会の日のことですが――」

「あっ、お、お待ち下さい！エリザ、部屋の外で待っていてください」

分かりました、という不本意そうな声。

そうか、エリザがいたんだ。

真っ青になって、ローズはリジンを恨みがましく睨んでいた。

本当に、彼女はどんな表情をしても美しい。

そう思っ て笑いかけると、怒ったように頬を膨らませた。可愛かった。

何を笑っているのかしら、この人は！

予想よりも甘い笑顔を向けられ、ローズは怒りと呆れを感じた。

リジンには、全く反省の色が見られなかった。

リジンが訪ねてきたのは、舞踏会の夜の……「忠告」の件だと思っ
っているし、それは間違えていないだろう。

ならば謝罪か、それに類することだと考えるのは至極まっとうだ。
しかし、ここまで普通に接されると、意識して怒っている自分が
子供過ぎるのかと思ってしまう。

「……レディ。忠告は、守ってらっしゃいますか？」

ちようど考えていたことを言われて、ローズの頬が赤く染まった。
自分でも自覚はあったし、リジンも目を丸くしている。

考えていたことと言うのも、実際は違うのだ。ローズが考えてい
たのはキスの「忠告」のことであり、多分、リジンが言ったのはそ
のままの意味での忠告だろう。

「……あの、」

「はっ、はい！」

「守ってらっしゃいますか？」

「あ、えっと。忠告、ですか？」

用心してくれ、と彼は言っていた。

「舞踏会から今日まで、用心しなければならぬことはありませんでした」

強いて言えば、今だろうか。さすがにそれを言えば厭味になるので、言わなかったが。

そうですか、トリジンはホッとしたように笑った。

「それよりリジン様……ユリス様とは、お変わりありませんか？」

リジンが、彼の兄と険悪な関係になっていないかが不安だった。ユリスの自業自得と言えばそれまでだが、リジンと自分が一緒にいたのをユリスは見ていた。そのせいで兄弟仲が悪くなってしまったら、申し訳なくて謝りたくなる。

「あはは、心配してくださるんですか」

可笑しそうに笑うリジンに、ムツとしながらも頷いた。エリザではないが、これで兄弟の仲に亀裂が入ってしまったら後味が悪い。

「ええ、まあ」

「お優しいんですね」

貴女は優しい。ローズは優しい。

何度も何度も、様々な人からそう言われる。わざわざ否定するほどのものではないから、否定しなかったけれど。

……私は。

「優しくなど、ありませんわ」

リジンに、自分が優しいと思われるのは嫌だった。

「お優しいと有名ですよ。まるで天使のようだとね」

「天使が聞いて呆れるでしょう。私は優しくなどありません。優しい者が、他人を見殺しにしますでしょうか？」

え？とリジンが目を見開くのを、ローズは柔らかな表情で眺める。突然客室が狭くなったような気分になり、彼女は窓の外を見た。咲き乱れるのは、大小様々な花。その半分以上が薔薇だ。

「外に移動しましょうか」

リジンが顎を引くのを、ローズは横目で確認した。

約束のキス

扉から出ると、壁に張り付いていたエリザが弾かれたように身を起こした。ローズの告白に緊張していたリジンの心は、そんなエリザを見てほぐれていく。微かな笑みを見せると、エリザは心外だとも言うように顔をしかめた。

しかし、文句を言うよりも、不自然なその場の空気に口をつぐんだようだった。

何故使用人とは空気を読むのが上手いのだろうか？と、それこそ空気を読まぬことを考えてしまう。

「お話は、終わったのですか？」

「いえ、違うわ。庭園を案内させていただくことになったの」

「庭園を」

怪訝そうなエリザだったが、ローズの有無を言わせぬ雰囲気にもまれたように、小さく頷いた。

「お供致します」

「供は大丈夫よ。用があったら呼ぶわ」

エリザは、やはりリジンを睨むようにして見た。嫌われてるのかな、トリジンは思った。好かれてはいないだろうが。

ローズはエリザの目の前を横切り、庭園の入口があるのだろうか向に歩いていく。リジンもついていった。

「優しいのは、私などではなくエリザだと思うのです」

エリザが見えなくなるところまで歩いて、ローズが言った。申し訳なさそうな顔だった。普通は、主人が使用人に気をかけることなどない。

エリザとローズが特別なのか、もしくはミュール家とメフィス伯爵家の結び付きの為せる技なのかもしれない。

ルーシヤンとその侍女のことを考えれば、後者が有力かと思われた。

「優しい……エリザが？」

そんなわけないでしょう。

リジンはそう言いたかったが、それは自分視点だと気が付いた。

ローズからしてみれば、自分に忠実でいつも気にかけてくれる、優しい侍女なのかもしれない。

何度も睨まれたリジンとしては少しも共感できない話だが。

「ええ。エリザは優しいです。分かりませんか？エリザは貴方方にも優しくかったのに」

ローズも、リジンと同じ表情——信じられない！という——をしていた。

……エリザが私に優しくかったことなど、あったか？

なかったと思う。絶対。

「ユリス様が私の部屋に……その、来られた時です。エリザがいなければ、ウォルツ伯爵家の方々は今頃、忙しかったと思いますよ？」

——忙しいって。

遠慮がちに、ただではすまされなかったのですよ？と言われていたのか。

にこにこと微笑むローズを、初めてリジンは恐ろしく思った。

庭園は、季節や今日の天気も手伝い、惚れ惚れするほどに鮮やかな雰囲気を醸し出していた。花は薔薇をはじめ、スイートピーやラズミレやら。男兄弟しかいないウォルツ伯爵邸の庭園はウォルツ伯爵夫人が一人で指揮っているが、この屋敷の庭園はローズやルーシヤンも関わっているのかもしれない。

「私、これまで自分に関わって、父様に報復された人を何人も見ているのです」

花を撫でながら、ローズは笑えないことを言う。

「……そうでしょうね」

リジンも、ユリスが夜這い一人目だとは思っていない。そういうことは何度もあったのだろうな、と思っている。

「そのたびに、お父様は相手の方に仕返しをしてくださいました」

「仕返し」などと可愛らしく言うが、実際はえげつないことをやっているのだろう。メフィス伯爵は、娘を溺愛していると有名だから。

「最初は、私やエリザに隠れて仕返ししていたので、エリザは気が付いていないようだったのですが。私や……リジン様のように舞踏会に参加していれば気付きますよね？」

「自分を襲った人が、全く参加していないということ？」

「そうです。貴族として、成り立たなくなっているのだと」

それは金銭的な意味合いでもあるし、評判や噂などでもあるだろう。メフィス伯爵に睨まれて、これまで通りに過ごせる者はいないということだ。

「お父様の仕業だと。すぐに理解しましたわ。もしもエリザなら、その時点でお父様を問い詰め、もうそのようなことはしないようにと願い出たことでしょう」

「しかし……レディ。貴女は止めなかったと？」

「そうです。私は、私のせいで一家ごと潰される方々に、何の感慨も浮かびませんの。こんな私が優しいわけがありませんわ」

……それはまた……。

ずいぶんとお優しい思考回路だと笑ったら、ローズは怒るだろうか。

「……確かに、優しくはないかも知れませんが」

「冷たいと思われませんか？」

「冷たいとは思いませんが」

そうですか。

ローズはガッカリした様子になった。

もしかして、と、リジンはローズの顔を覗きこんだ。気のせいかもしれないが、彼女は……。

「——優しいと思われたいのですか」

「……えっ？」

思ってもみなかった、という表情をされた。やはり違うのかと発

言を撤回しようとする、ローズは自分の口元に手を当てて考え込むような仕種をした。

やがて結論が出たのか、顔を上げてリジンを見つめてくる。真面目な表情でも、ローズは美しかった。

「そう……かもしれません」

「本当に？」

「分かりませんが……、リジン様にはそう見えたのですよね？」

そう見えたというか。ふと思っただけだった。

しかし、ローズは確信したようにスッキリとした表情をしていて、それに水を差す勇氣はリジンにはなかった。

「……きつとそうだわ。ずっと気持ち悪かったので、スッキリしました。だから、私は優しいと言われたくなかったのね。ありがとうございます、リジン様！わざわざ教えて下さって、優しいのですね」

ローズとは違い、リジンは優しいと言われて喜べた。

その後、ローズは嬉しそうに庭園にある花の解説をしてくれた。リジンの予想通り、メフィス伯爵邸の庭園は夫人と姉妹で管理しているらしい。薔薇が多いのは、姉妹の趣味なんだとか。

「レディ・ローズが薔薇好きなのは、なんとなく分かります」

「名前も、ローズ……薔薇ですからね」

ゆっくりと歩んでも、屋敷の正門に到着してしまう。自身の屋敷よりも広いはずなのに庭園が狭く感じられた。

「あまり長居しては迷惑ですよ」

この屋敷に乗りつけた馬車と、そこに座る召使が目に入って、そう言った。召使に遠慮したわけではなく、あまり遅くいてメフィス伯爵と鉢合わせしたら困るなと思ったのだ。

言うど、ローズは頷いた。少し残念そうに見えたのは、リジンの気のせいだろう。

「あ。エリザを呼びますか？」

「……何故？」

「エリザと仲がよろしいでしょう？」

——何でそう思うんだろう？

ローズがそんな勘違いをする場面はなかったと思うのだが。

それはそれは丁重に辞退すると、召使に声をかけて馬車の用意をさせた。

厩舎に馬を預けていると言うので、馬を待つ。

ローズがリジンに向き直った。

「本日は来てくださって、ありがとうございます」

「いいえ、私もレディと会いたいと思っていましたから」

リジンは甘く柔らかな笑みを浮かべたのに、ローズは複雑な表情だった。リジンがそのことを指摘する前に、ローズは歪んだ笑みを浮かべた。一目で作り笑いだと分かった。

「リジン様、お待たせ致しました。馬の用意が整いました」

召使が準備の終了を知らせにくる。

分かった、と返事をし、美しい顔で変な笑顔を作るローズに手を

伸ばす。

撫でるように髪に触れた。ローズの頬が赤くなった。

「舞踏会で会えますか？」

「え、ええ。もちろんですわ」

「踊ってくださいますか？」

「え、ええ。もち……」

はたとローズは言葉を止めた。

……もう少しだったのに。

用心しろと言ったのは自分なのだが。

もう一度くらい——出来るのなら、何度でも——、ローズと踊りたかった。

「——もちろんですわ。踊りましょう！」

了承の返事は、まるで自棄になったように。

一瞬、怒られたのかと思って怯んだ。

「……え。よろしいのですか？」

「ダンスくらい。構いませんわ」

「伯爵に睨まれなければいいのですが」

真剣に脅えるリジンをも、ローズは可笑しそうに笑った。

「私から、お父様に言っておきます」

「本当ですね？」

「ええ」

「約束ですよ」

あの作り笑いが消えた瞬間に、リジンはローズの頬にキスをした。ローズは目を丸くして頬を押さえる。頬へのキスならば、家族や近しい友人などとも交わすことが多い。

どういう意味でのキスか分からないのだろう。

「約束のキスです。……貴女に好意を抱く者として」

呆けていたが、ローズはその言葉で我に返ったようで、

「約束しましょう。……友人として」

リジンの頬にキスを返した。

天使の舞踏会

ある日を境に、ローズが普通に戻った。エリザと、ルーシャン、リドニア。それから屋敷に仕える使用人の内、何人かはその理由を察していた。色恋沙汰の全くないお嬢様のもとに、男性のお客様がきたのだ。これまで何度も、「失礼な輩」が来たことはあったが、あの厳しい侍女、エリザが連れてきて、それに加えてローズと親しげに話し、あまつさえ、帰り際に口づけ（頬。情報提供・とある伯爵家の召使）を交わしていたという。

普通、使用人内では情報など瞬時に駆け巡る。悪事だろうが善い事だろうがそれは変わらない。

だというのに、今回の情報が数人の、その場にいた使用人のみで留まっているのは――。

ローズお嬢様直々に口止めに来られたのです、と後に庭師は語った。

舞踏会の日は、すぐにやって来た。

主催者は国王であり、王城のホールで開催される。

いつもより気合いの入ったドレス、装飾品、化粧品。髪を結うエリザの顔は、真剣になりすぎて強張っていた。全ての支度が終わった時、ローズは疲れきっていた。

それなのに、行きたくないとは少しも思わなかった。普段ならば内心帰りたい、と思うこともあったはずなのに、今日だけはそんな

ことにはならなかった。

ローズがエリザや、他の侍女を連れ立って門へ向かうと、四頭立ての馬車が待っていた。

その近くには、メフィス伯爵夫妻が寄り添い合って立っている。

仲の良い両親は、ローズの憧れであり理想だ。

「ローズ。似合っているよ。とても魅力的だ」

「ありがとうございます、お父様」

「ふふ……本日は、王城で一泊することになるけれど。気をつけるのよ？ローズ」

「そうだぞ！」

「もちろんですわ！！」

ふざけるような夫人の発言に、父娘は同じくらいの気迫で頷いた。

——リジン様に言われているもの。用心するわ……！

メフィス伯爵はそんなローズに満足げに笑うと、妻を馬車までエスコートする。ローズも、父親の侍従であるトールにエスコートされ、馬車に乗り込んだ。

「お姉様！」

トールが馬車の扉を閉めようとした時、少女特有の甲高い声がその場に響いた。

ローズが彼を止める前に、トールは扉を閉める手を止めた。扉の隙間から見えるのは、長い金髪。

「ルーちゃん！？」

「お姉様！」

ルーシヤンの後ろから、お嬢様くつ、と気の毒なりドニアの叫び

が聞こえる。

「ルーちゃん、どうしたの？リドから離れちゃ駄目じゃない」

「お姉様、王城で開かれる舞踏会に行くのよね？」

「そうよ。ルーちゃんも、二年後には行けるからね、大人しくして
いるのよ？」

もう戻りなさい、と促したローズに向かって、ルーシャンは言っ
てはならないことを言ってしまった。

方々に口止めし続けたローズの努力を一瞬で無にする、爆弾のよ
うな一言。

——あの男の人に会いに行くのね！？

ピシッと車内の空気が重くなり、沈黙がその場を支配した。

誰も喋らない馬車ほど気まずいものはない。庶民が使うという乗
り合い馬車ならいざ知らず、気心の知れた——というより、家族で
乗っている馬車が無言なのは、正直なところ辛い。

だからと言って不用意に話しかけて、墓穴を掘るのは避けなけれ
ばならない。

結局皆、無表情で俯き、かなり長い間、沈黙に包まれた馬車で揺
られていた。

馬車が止まって社外に出た時は、なんて新鮮な空気なのかと何度
も何度も深呼吸してしまった。

「――行きましょう」

妻の言葉に、メフィス伯爵は頷いた。

夫や兄弟、婚約者などの近しい親族に男性がいない場合は、高位の使用人が令嬢のエスコート役を務める。

ローズのエスコートは、トールが行った。

会場に入ると、扉付近に立っている使用人が、

「メフィス伯爵がいらっしやいました！」

と叫んだ。トールはそそくさと退散し、使用人専用の控室に向かう。

客がほとんど全員振り向き、中でもメフィス伯爵派の貴族達は上手な作り笑いを浮かべてローズ達の方に寄ってきた。

驚くほどに、毎回同じだ。

……リジン様は……。

たくさん料理も、色鮮やかな令嬢達のドレスも、一流の楽団の音も。ローズにとっては何の価値もない。目に入ろうと、まるでそこに何もなかったかのように無視してしまう。

「ローズ？誰かを探しているのか」

必死になって招待客を見つめっていると、隣に立つメフィス伯爵が不機嫌そうに言った。……いや、事実、彼は不機嫌だった。

ルーシヤンの言った「男の人」を、ローズが探しているのだと疑っている。

事実なのだが。

「い……いいえ、お父様。気のせいでしょう」

メフィス伯爵からの疑いは晴れなかったようだが、貴族に話しかけられてローズから視線を離れた。

「レディ・ローズは、もう踊る方を決めてますの？」

「よろしければ、わたくしの息子と踊って下さらない？」

「伯爵、我が息子は、レディ・ローズと並んでも見劣りしないとは思いませんか」

普段は何も思わないのに、今日だけは、彼らの話がとてもくだらなく、そして嫌なものに感じられた。

誰かに誘われる前に、早くリジンを見つけてしまおう。

そう思ってその場から離れようとすると、誰かに強く腕を捕まれた。

「ローズ。ムナ子爵の令息からダンスの誘いがあった。踊るだろう？」

「あ……お父様。私、」

「踊るだろう？」

——彼とはまだ踊っていないはずだ。

ローズにしか聞こえない声。囁かれた言葉に背筋が冷えた。

「踊り、ます」

「令嬢」に、選択権などないのだと。

着飾り、微笑み、親の指示通りに婚約し嫁ぐ。拒否など許されない。拒むなら、全てを失う覚悟で。

自分に差し出される手に、自分の手を乗せた。相手の顔は、醜くないのに目に入らない。

ただ単に興味がないのだと、その時のローズは気付かなかった。

ホールの中心で、周りで踊る人々に混ざってステップを踏む。

「……あの、お上手ですね」

「ありがとうございます」

「僕、トニーって言ってますけど」

「そうですか」

美しいはずの音色は、まるで無機質なただの音。

今の自分は、きちんと笑えているだろうか？

これまでどうやって笑っていたのか。笑うことが義務だと思ふと、表情がどんどん強張っていくのを感じる。

だと言うのに、相手——トニーはローズの美貌に見惚れている。うっとりとその愛想のない顔を眺めていた。

「レディ・ローズ……お美しいですね。噂通りだ」

「噂ですか……」

——リジン様のおっしゃっていた、天使とか何とかのことかしら。リズムに乗っていると、リジンと初めて踊った時のことが思い出された。あの時はあの人に対して何の思いもなかったから、どんな気持ちだったかは覚えていないけど。

トニーと踊り終えたら、リジンを探せないだろうか。

また誰かと踊らされるかもしれない。けれど自分は、父親に逆らえないだろう。

——リジン様……。

間もなく曲が終わり、ローズとトニーは頭を下げ合う。

「ありがとうございます、レディ」

「いいえ……、こちらこそ」

興奮したようにローズを見つめるトニーだが、ローズのルールに逆らう気はないらしい。

名残惜しそうに、ローズから離れようとした、その時。

「――あ」

「えっ？」

トニーがローズの後ろを見て驚いたように声を上げた。その声に驚き、ローズも振り返る。

――そこにいたのは、整った顔立ちの男性。
ステイブン殿、とトニーが声もなく呟いた。

ウォルツ伯爵一家が王城に到着した時、メフィス伯爵はまだ来ていなかった。元々高位の者は遅れて登場し、先に来ていた下位の者がそれを迎え入れる、というのが主流なので、それについては驚かない。

両親は広間に入った瞬間に歩き回り、方々で話し始めたのでリジンはユリスと二人きりで残された。

「まったく。相変わらずだな、あの人達は！」

ユリスも、毎回のように呆れた顔で両親を見る。リジンとしてはどちらもいつものことなので特に気にしない。

それよりも早くメフィス伯爵――というよりその娘――が来ないかと落ち着きなく扉を見つめている。

「お？誰か待ってんのか？……ああ、ローズ嬢か」

ニヤニヤと笑う兄に、リジンは激しく否定したい気がした。親族にその手の話をされることほど嫌な物はない。

リジンは無言で黙り——最終的には頷いた。否定したい気持ちよりも、同時に浮かんだ肯定してしまいたい気持ちが上回ったのだ。

「……もう彼女に、変なことはするなよ？」

「しないって。俺はそこまで悪趣味なことはしないからな」

弟の恋路を邪魔するような、と呟かれ、リジンは無言で俯く。

やはり、恋路——なのだろうか？

普段、その気もない女性に口づけたり、約束のたびに頬にキスしたりなんてことはしない。ユリスだって弟のしたことを聞けば驚くだろう。

……とそんな時、扉が開かれた。

時間的にまだ違う、と思う心とは対照的に、多大な期待を伴って眼がそちらへ向く。

「ケルズス侯爵がいらっしゃいました！」

高めの、良い声の使用人の大声が響く。げっ、とユリスが小さく悲鳴を上げた。

ユリスの眉も寄る。

期待ハズレどころか——最悪だ。ローズが来ない舞踏会であれば、このまま帰ってしまいたい。

「彼」に見つかる前にと、そそくさと扉近くから移動しようとしたら、トンと肩を叩かれた。意識せず、頬が引き攣る。

「よう」

振り向かなくても誰だか分かるが——それでも振り向かなければ
煩いだろうなと思い、リジンは振り向く。知人との挨拶は手早く済
ませ、万全の状態でローズと踊ったほうがいいかもしれない。そん
な思いも手伝ったのだが。

そこに立っていたのは。ローズやルーシヤンのものよりも濃い、
はつきりとした金髪の男だ。リジンはもちろん、ユリスよりも美し
いかもしれない。人を馬鹿にするような軽薄な笑みを浮かべ、リジ
ン達を見ていた。

心の中ではともかく、リジンはにっこりと笑みを浮かべる。誰が
相手でも笑えるのは貴族全体の特技だが、リジンは中でも突出して
笑うのが上手い。

素っ気ない声に、まるで仲の良い友人を相手にするかのように気
さくに返事を返した。

「……どうも。久しぶりだね、ステイーブン？ 君は相変わらず整っ
た顔立ちをしている」

「はは、お前は相変わらず口が上手いな。愛想笑いも上手い。だか
ら優しく怒らないリジン様、なんて言われるんだ。兄貴を見習えよ」

ユリスは、リジンを笑う彼……ステイーブンの腕を掴んで至近距
離から睨みつけた。

感情の起伏が激しく怒りっぽいユリスが、何よりも弟のことを馬
鹿にされることを嫌っているのを知っているのは、今のところステ
イーブンだけだ。その上でユリスを苛立たせ、愉しんでいるのが悪
趣味だ。

「立場を理解しろ、ステイーブン。リジンに好き勝手言いやがって。
……大体、お前の実質的地位では、俺らより遅く来るべきじゃない。
弁えろ」

「なに怒ってんだよ？」

ステイーブン「ケルズス侯爵令息。

ケルズス侯爵は、メフィス伯爵派だ。

侯爵位を持つてはいるが、資産や権力共にメフィス伯爵には——
もちろん、ヒルドマン侯爵にも——遠く及ばない。

ウォルツ伯爵と同程度、もしくは少し下だろうか。

ウォルツ伯爵よりも後に来るのは、次期ウォルツ伯爵のユリスとして黙っていられないところである。

しかし、ケルズス侯爵は自身の家がウォルツ伯爵よりも劣っているとは夢にも思っていないようで、何かにつけては張り合ってくるのだ。家族単位で迷惑している。

全く悪びれた様子のないステイーブンに、ユリスは苛立ちを含ませた溜め息を吐いた。

同じメフィス伯爵派だというのに、なぜ争わなければいけないのか。ユリスは疑問に思い、すぐに答えを導き出した。

……こいつが身の程を弁えないからだ。

「もう、いい。どうでもいいから俺達に構うな。どっかに行け」

ユリスが野良犬を追い払うように手を振ると、

「あっはは、酷いなあ。ユリス、お前はリジンを見習ったほうがいいぞ」

「お前もな」

ステイーブンはしばらくユリスと喧嘩しながらそこにいたが、ふと真面目な顔になった。

彼とユリスを、令嬢達がチラチラと盗み見しているのにリジンは気が付いたが、無視した。

「そうだ。知ってるか？俺とローズ嬢の婚約話があるって噂が――」
「はあ！？」

「あんだけど――って、凄い食いついたな、リジン？お前も興味あるの？」

「お前も、って、ステイブン、君も彼女に興味が？」

もちろん、と頷くステイブンに、リジンは倒れそうになった。
ステイブンはもの凄く女性受けする顔だ。ローズとも似合いそうだし。今だって、たくさんの令嬢達がこっちを見ている。さっさと諦めればいいのに。

優しいリジンの優しくない思いには気付かず、ステイブンはへらへらと笑う。

「彼女に興味がない男なんていないだろうよ。美人だし、何より――
――メフィス伯爵の長女なんだから」

「んだよ、爵位が目的か」

爵位が目的でローズに夜這いを仕掛けたユリスが、心底嫌そうに吐き捨てた。呆れた、というふうだった。兄さんもそうだっただろう、とリジンは苦笑した。

「今日、ダンスに誘ってみようかな？俺まだ踊ってないし。ローズ嬢とは一度しか踊れないんだろ？お前らはもう踊ったのか？」

完璧な髪型を手櫛で崩す。崩しても完璧だった。

そんなステイブンに冷ややかな視線を向けながら、ユリスは「いや」と否定する。

「俺は踊ってないし、踊る気もないよ。リジンは踊ってたよな？」

「え、あ……うん」

「ふーん……どうだった？」

問われて思い出す。どうだったかな。

笑顔が可愛いなと思った。ダンスも上手かった。

けれどその後の、庭に立っていた薄着……というか夜着……を着ていたローズを思い出す。

あれを見付けたのが自分でなくユリスだったら、今頃彼女は兄の横で笑っていたのだろうか。

「笑ったり眉を寄せたりして——何やってんだこいつ」

「うーん、遅い春に戸惑ってるんだろ？」

「はあ？」

メフィス伯爵が来場したのは、それから少し後のこと。使用人の声がして、ワラワラとメフィス伯爵派の貴族達が彼のもとに向かう。ウォルツ伯爵もケルズス侯爵も同じくそれに加わっていて、三人は何ともむなしい思いでそれを見た。

「あ。ローズ嬢」

「え？」

「あ、本当だ」

ステイブンが指差した方には、キョロキョロと辺りを見回している少女——ローズがいる。

ピンクブロンドの髪を結い上げ、華やかなドレスや装飾品に囲まれた彼女は正に、舞踏会の華と呼ばれるのに相応しい。

他の令息と同じく、リジン達も見惚れてしまう。令嬢達は面白くなさそうだが、しかしローズの身分を理解しているので愛想笑いをしてメフィス伯爵夫妻やローズを見つめている。

「お前……本当にローズ嬢との婚約話があるのか？」

「噂だけど——やっぱり噂止まりだろうな」

「ああ。倍率高いぞ」

兄とステイブンが話しているのを聞きながら、リジンは彼女に似合う男性はどんな人だろうか考える。

——いっそ、ヒルドマン侯爵家のリクト殿とか？

いや、ヒルドマン侯爵令息とメフィス伯爵令嬢が結婚するなんて、面白そうだが有り得ない。

ぼうつとメフィス伯爵一家を見ていると、息子を引き連れたムナ子爵が貴族達の輪を掻き分けて入っていったい。

「あ、トニーだ」

「トニー？ああ、ムナ子爵のところの。ステイブン。君、トニーと親しかったっけ？」

「いや？でもローズ嬢の噂を聞いて好みだって言ってたぞ」

しばらくすると、トニーがローズの手を引いて広間の中心に出た。踊るのだろう。

ユリスとステイブンはおおっ！と気弱なトニーの勇氣ある行動に驚き、リジンは眉を潜めた。

「俺次行こうっと」

「あ、おいステイブン！？」

話したこともないトニーに対して何とも言えない気分を感じなが

ら、リジンはステイブンを追おうとした。あんなのと踊ったら、ローズが汚れる。

実はユリスよりもステイブンのことを厭わしく思っているリジンだった。――が。

「あ、あの。リジン様……私と踊っていただいても構いませんか」
「…………。ええ、もちろん……」

途中、ずっと話しかける機会を窺っていた令嬢によって、それは失敗に終わった。

「優しい」リジンは、その誘いを断れなかった。

ローズはぼんやりと、彼……ステイブン＝ケルズス侯爵令息を見た。彼とローズが会ったのは初めてではない。

何度か会ったが――彼は相変わらず美しい。

「……お久しぶりです、ステイブン様」

「ご無沙汰しておりました。レディ」

ステイブンはローズの手をとり、その甲にキスを落とした。ローズの後ろでトニーは、どうしたらいいか分からずオロオロとしていた。

「レディ、私と踊っていただけますか」

「……、……もちろんですわ」

——リジン様を探したい。踊るのなら、あの方がいい。
そんな思いはローズの中で燦り、行き場のない鬱憤としてポツリと心に溜まる。

沈んだ表情を浮かべるローズを、ステイブンは不思議そうに見た。

「あれ。噂と違いますね。レディ・ローズはいつでもニコニコと笑っている噂でしたが」

「……噂……」

とくん、鼓動が跳ねる。

これが良いものでないと、ローズは頭のどこかで認識していた。
顔を歪ませたローズ。ステイブンはやはり、それに首を傾げた。

「ご不調ですか」

「ええ——そうかもしれませんわね」

わざとぞんざいに返す。これに怒って、ステイブンがダンスを止めてくれないだろうか。

曲調は難しいものになる。ローズは心ここにあらずといったふうで、しかし完璧に踊り続けていた。ステイブンの称賛を孕んだ視線にも気付かない。

ダンス途中で、相手の顔から視線を逸らすのは失礼だと教わった。
だから見つめ合う形だったのだが、ステイブンが不意にローズから視線を逸らした。

「あ」

「……? どうかありませんか」

ローズも振り向き、そして振り向いたことを後悔した。

——私は、上手く笑えもしないのに。

貴方はどうしてそんなにも楽しそうに踊っているの？

ローズの視界に飛び込んできたのは。

どこかの令嬢と楽しそうに笑い合って踊る、リジンの姿。

天使の舞踏会2

辛うじて歪んでいた唇は、完全に歪みを――笑みを消した。

リジンはさも楽しそうに令嬢と囁き合っている。

どくん、鼓動が、遅く強く打った。胸に溢れる思いはなんだろう。リジンに対する温かな柔らかい波と、令嬢に対する黒く淀んだ波が、同時に生まれて同時に弾けた。

恋をしたことがなかったローズはその気持ちを言葉に出来なかったし、それを彼女に伝える者もいなかった。

「ダンスに集中されていますか？レディ・ローズ」

華麗にターンしたローズに、ステイブンは囁きかける。いつの間にかステイブンはリジンを見ておらず、ローズも虚空をぼんやりと見つめていた。

「あ……も、申し訳ございません」

――ダンスに集中しなければ。じゃないと、相手の方に失礼だから。

ダンスの家庭教師が言った言葉をそのまま、心で繰り返す。これまでは、ダンスに集中しようと頑張ったりすることはなかった。誰と踊ってもそれなりに楽しかった。

なのに今は、リジンに傾きかけようとする心を必死に、ステイブンへ向けようとしている。彼と踊るダンスに集中しなければ、と半ば命令のように。

「レディ・ローズは、ダンスをする時、それは楽しそうに踊ると聞

いていたので。少し意外でした」

「また噂、ですか……」

ポツリ。

心に溜まるものの、正体は。

「私は今、楽しそうではありませんか？」

「——ええ、まあ。あまり楽しそうには見えませんね。私としましては、例えばあの、リジンと踊っている令嬢のような顔を想像していました」

リジンと踊っている令嬢……。彼女の顔を盗み見して、ローズは苦笑した。

恍惚として、まるで生きたまま楽園に行っているような。頬を染めてリジンを見上げている彼女は、少女のようにも大人の女性のようにも見える。

——それはまるで。

「恋をしているみたい……」

「あっははは！冗談ですよ。レディにあんな目で見つめられたら、私はおかしくなってしまう」

ひとしきりステイブンが笑うと、ローズは恐る恐る言った。

「リジン様って、人気あるんですね」

「おや、私と踊っているのにリジンの話ですか？——別に構いませんが。リジンはモテますよ。あいつも、レディと似たような噂がありますからねえ？」

「天使のように優しい……と？」

「ええ。怒らないし、優しい。兄弟で性格が逆なんですよねえ。面

白いことです」

私とルーちゃんも逆だわ。そう思ったが、ローズは言わなかった。ステイブンはリジンの話をローズにしてくれ、その間だけはローズもリジンから意識を逸らし、純粹に楽しめた。一曲が終わり、ステイブンはローズに頭を下げる。同じくローズもドレスの裾を持ち上げ、礼をした。

「とても有意義な時間を過ごせました」

「ええ、私もです」

「レディの興味も分かったことですし」

ステイブンがチラリと、自分達と同じように頭を下げ合っているリジン達を見た。

ローズの頬が熱くなる。

「どうです？ バルコニーで少しお話でもしませんか？」

「あ、私——」

ニヤニヤと笑うステイブンに断りの言葉を返そうとすると、後ろから腕を捕まれた。驚きで、肩が揺れる。

ステイブンはローズの腕を掴んでいる人を見て、笑みを深める。

「よお、リジン？」

砕けた話し方。それよりもまず、彼の口から出た名前に耳が反応した。

……リジン、様？

振り向くとやはり。心に充満する期待は裏切られなかった。自然と唇は弧を描く。

そこに立っていたのは、怒った顔をするリジンだった。

「リジン様……！」

リジンの手を握ると、彼は驚いた顔になった。ローズの腕を引き、スティーブンから引き離す。

「まったく君は……」

眉を寄せてスティーブンを見たリジンだったが、それに続く言葉はなかった。笑みを浮かべたローズと目を合わせて、へにやりと疲れたような顔をする。

「やっと会えましたね、レディ」

「ええ。私、リジン様のこと探したのですが、すぐに見つからなくて」

リジンに頭を撫でられた。嬉しくて、その優しさに泣きたくなる。二人を見ながらスティーブンが、近寄ってきたユリスに「あいつらいつの間に仲良くなったの？」と尋ね、「知らん」と返されていた。

リジンは新しく流れる曲に顔を上げ、ローズに手を差し出した。

「レディ。踊ってくださいますか？」

「ええ……！もちろん——」

カツン、カツン、カツン

背後からの足音に、何か嫌な気配を感じた。ユリスとスティーブンが何とも言えぬ表情を浮かべた。

振り向く前に、声が降ってくる。

「ローズ。彼とはもう踊っただろう？それとも、ルーシャンがいていたのが、彼なのかね？」

——お父様。

嬉しさは、その場にあり続け、凍りついた。幸せな気分は一気になくなり、リジンの手を握る力は強くなった。リジンも、ローズの腕を自分の方へ引き寄せる。

メフィス伯爵に群がっていた貴族達が、なんだなんだとローズ達を見る。騒ぎの中心にいるリジンとユリス、ステイブンを見て、ウォルツ伯爵とケルズ侯爵が真っ青になった。

「こんばんはメフィス伯爵。舞踏会ぶりですね」

にこり、リジンは踊っていた令嬢に向けていたような、愛想よい笑顔をメフィス伯爵に向けた。それは、普段から愛想笑いを浮かべているリジンにとって簡単なことだったが、ローズは不安に満ち溢れた顔で父親を見つめる。愛想笑いは苦手だった。

いつも夫をいさめ、ローズを助けてくれるメフィス伯爵夫人は、どこかの夫人と話をしている。

メフィス伯爵は、そんなリジンを一瞥し、そしてステイブンと並んで苦笑いしているユリスを見ると吐き捨てた。

「よくもまあ、ローズに近づけたものだ。兄弟揃って図太いな」

「お、お父様……!」

あんまりな父親の言葉に、ローズは顔を赤くしていきどおる。
ユリスの夜這い事件を知らないステイブンだけが、何かしたの
?とユリスに言った。無視された。

「約束は破棄された。もうローズに近づかないでいただきたいな、
リジン殿、ユリス殿?」

「しかし」

「おっ、お前達!」

もう少しで言い争いに発展しそうになった時、メフィス伯爵の取
り巻きの群からぱっと一人の男性が登場した。……ウォルツ伯爵だ。

「……父上?」

「リジン。メフィス伯爵に逆らうな。——まったく、ユリスならと
もかく、お前が伯爵に逆らうなんて……」

「逆らってなど、ただ私は、」

「リジン!」

音楽は止み、普段はさして目立たぬウォルツ伯爵の怒鳴り声がホ
ールに響き渡った。誰も何も言わなかった。

どうしたの?とメフィス伯爵夫人が夫に寄り添い、メフィス伯爵
は素知らぬふりをして優しげに肩を竦めた。

「先に客室に行っていないさい。舞踏会が終わるまで部屋を出ないよ
うに」

「……嫌です」

「リジン」

ウォルツ伯爵の声は、嘆くような音だった。いつもは従順な次男が、真っ向から父親に逆らっているこの事態を。

リジンは唇を引き結び、睨むように父親を見ていた。もしかしたら、睨みの対象にはメフィス伯爵も含まれていたかもしれない。ウォルツ伯爵には恐ろしくて、考えたくもなかったが。

「リジン、様……」

身近な少女の、怯えるような細い声にリジンは顔を上げた。

ローズは明らかに怯え、最悪感を感じているようだった。

自分のせいで、彼と父親が争っている、と。それは正しいとも言えたが、同時に間違えていると言えた。父親と争っているのはリジンの意思だったが、ローズと踊りたくて争っているのだから。

大丈夫ですよ、と小声で強がりと言うと、ローズは眉を下げて、困ったように笑った。メフィス伯爵にとっては、それすらも面白くないらしい。

氷点下の、まるで凍り付きそうな空気になり、ウォルツ伯爵の顔色はさらに悪くなった。

「出ていきなさい、リジン……！」

ウォルツ伯爵の、どこか懇願するような声。ローズの泣きそうな顔と、きゅっと腕を握ってくる感触。

「——分かり、ました」

メフィス伯爵の顔を見ながらリジンが言うと、伯爵は、ひどく満足気に頷いた。

ふと、ローズがどんな表情をしているのかが気になり、そっとその表情を窺うと、泣きそうに表情を歪めていた。

ローズの髪を優しく撫でて、彼女が掴む自分の袖を解放してもらう。わずかにシワになったそこが、ローズの不安を強く示していた。

「では、戻ってますね、レディ」

「……はい」

ゆっくりローズから離れ、メフィス伯爵夫人の隣を通ると、「ねえ？」と夫人がメフィス伯爵とリジンを見比べて呟いていた。

「あのリジン殿って……」

「ああ、いいんだよ」

「よくないわ、ちゃんと聞きなさいっ」

背中に多くの視線を感じながら、リジンは広間から退場した。

ローズと踊れなかったことが、思っていたよりも悲しかった。

リジンが広間から退場すると、止まっていた時が動き出したように、音楽が始まり人々は踊りだした。ユリスがローズにちかづこうとすると、それを遮るようにウォルツ伯爵がユリスの腕を掴んでどこかへいなくなった。恐らく、弟のような事態をおこさないようにするのだろう。

壁に背をつけ、ローズから離れた場所にステイブンは移動した。メイドがカクテルを渡してきた。それに口をつけながら、ステイブは上目遣いにローズを観察する。

落ち込んだ様子の彼女に、トニーが何度も話し掛けてきていた。明らかに一方通行だと分かる。ローズは身のない相槌を打ち、何度

か無視していた。

——リジンで……結構馬鹿だったんだな。
そう思った。

ローズと上手くやっていたようだが、彼女と踊りたいばかりに父親に逆らい、同時に絶対的な権力を持つメフィス伯爵にまで逆らった。メフィス伯爵の娘は二人とも母親似で、伯爵の愛情を一身に受けていることで有名なのに。

自分なら、もっと上手くやる。そう考えてから、ステイーブンは思わず笑ってしまった。

上手くやるも何も……、もうローズはリジンに惹かれているというのに。自分は何を思っているのだろうか？

「あ、レディ、カクテルをどうぞ！料理をお持ちしましょうか？それとも踊りますか？」

ムナ子爵令息のトニーが、あれこれと話し掛けてきて世話を焼いてくる。そんなことをリジンがやれば絶対に機嫌を悪くするだろう。メフィス伯爵は、トニーには何も言わない。相手にしてほしくないだけなのかもしれないが。

メフィス伯爵夫人はそんな二人を見て微笑ましそうにしていた。それから複雑な表情を浮かべる夫を見る。

「ねえ、貴方。後で話があるの」

「舞踏会が終わったらでいいかな？」

「ええ、いいわよ」

両親が話をしているのにも気付かないで、ローズはぼーっと前を見る。

「レディ、夜風に当たりませんか？熱気がこもって、暑いでしょう」
「いえ、別に……」

「バルコニーに出ましょう！ね！？」

「……はい」

——リジン様。貴方とダンスを踊れないことが、何故だか、とても寂しいです。

ローズはトニーを見て、静かにため息を吐いた。

天使の舞踏会3

大広間の厚い扉をもつてしても、舞踏会の喧騒は遮れないらしい。賑やかな音楽を背中に聞きながら、リジンはゆつくりと歩いていた。……腹立たしかった。

自分の父親が。ローズの父親が。果ては、余計なことをしてくれた兄までも。

底から沸き上がるように怒りは、ゆつくりとリジンを埋めつくしていった。部屋へ戻る気は、ない。

ここで彼女を諦めてしまったら、二度とローズと踊れないだろうから。

コツコツと靴音を響かせながら、ふと、リジンはローズの侍女、エリザのことを思い出した。

——彼女も、この舞踏会に来ているのだろうか。

いや、来ているだろう。エリザはローズの侍女で、ミュール家でもあるのだから。今回のような、一夜を明かすような舞踏会に付いてこないわけがない。

彼女を探そう、とリジンは決めた。あのエリザを味方につければ、怖いものは何もない。

そんな偏った思い込みをして、リジンは使用人用の控室を探しに出た。

「夜風が気持ちいいですね、レディ！」

「ええ」

バルコニーに出て、トニーはローズに笑いかけた。ローズは笑お

うとして、そしてそれが出来ないことに気が付いて笑うのを諦める。わざわざ笑わなくとも良いだろう、と思った。

トニーは自分の横に立つ女性の美しさにうっとりとし見惚れた。彼女の笑みが曇る原因に、心底腹を立てた。

「……勘違い男と言うのは、気の毒なものですよね。レディ、そうは思いませんか？」

庭園にある噴水を見下ろしながら、トニーが言う。何のことかと、ローズは彼を見た。

「……はい？」

「ウォルツ伯爵のとこの、リジン殿です。貴女のルールに従わず、無理矢理レディと踊ろうとするなんて」

——無理矢理、じゃないわ。

私は、リジン様と踊りたかった。

父親の制止を振り切って。いつまでも彼と踊れたら。それは、どれだけロマンティックで幸せな時間となるだろう。

そもそも、どうしてそんなことを思うのかも分からないまま、ローズは燦る思いを持て余す。

「なんて図々しいんでしょうね、全く。大体、天使のようだとか言われて調子に乗ってるんですよ。天使はレディ・ローズなのに」

トニーの言葉を聞いていたくなくて、ローズがホール内に戻ると、トニーも当然のように付いてきた。煩わしい、とローズは嘆息した。室内は暖かい。何事もなかったように続けられる舞踏会に、先程の騒ぎは夢だったのかと思えてしまう。

それでも、ローズの胸の痛みは本物で、夢なんかではないことを

思い知らされた。

「…レディのお優しさを利用して、もう一度踊ろうだなんて。なんとタチの悪い」

「……」

リジンが悪く言い続けるトニーに嫌気がさして、ローズは振り向き彼を見た。

何も知らないくせに。自分のことも、彼のことも。

「トニー様、リジン様を悪く言うのはお止めください」

「…どうしてですか？彼は、無理に貴女と踊ろうとしたのに。嫌がる貴女を、無理矢理……貴女は優しいから、」

無理矢理、無理矢理とまるでローズを被害者のように言うトニー。何も知らないくせに。ただそう思った。

普段の柔らかい口調とは違う、鋭い刃のような声にトニーは口をつぐみ、二人を眺めていたメフィス伯爵夫妻がギョツとしたように目を見開いた。

「ロ、ローズ？何があったの？」

母親が自分に近寄るのをチラリと見て、ローズはもう一度言った。

「無理矢理では、ありません。トニー様」

ローズの声を聞いた人が数人、彼女達を見た。ドキドキと鳴る心音は、大声を出したからか、それとも、夫人の横に立つメフィス伯爵の反応を恐れているからなのか。

「私は、私の意思でリジン様と踊ろうとしていたのです」

「——ローズ。何を言っている？」

いつもは、ローズやルーシヤンに優しいメフィス伯爵。今日は、父親の怒る場面ばかり見ている。こんなにも恐怖の対象になるのかと、ローズは顔を強張らせた。

——恐い。とても。

どうしてリジンのいる時に、共に逆らわなかったのだろう。

あの時は、こんな気分ではなかった。リジンの背に庇われた時は、ただ不安でしかなかった。

けれど、トニーが彼を悪く言うのに、耐え切れなかった。

「お父様。……お願い、します。リジン様と踊らせてください……」

「……」

メフィス伯爵が眉をひそめる。トニーは何が何だか分からない、という表情を浮かべている。

伯爵夫人がキョトンとして首を捻った。

「ねえ、ローズ……」

そんな時、タツと地面を蹴る音がした。それは軽い音で、そこにいるほとんどの人が聞き取れなかった。しかし、緊迫した空気の中にいたローズ達は正確に聞き取り、ふとそちらへ目をやる。

「すみません、レディ」

ローズにしか聞き取れない小声。ふわりと優しく何かに包まれ、

いきなりの浮遊感に襲われる。

「え？……えっ？」

「……っ！」

眼前に広がる白い布に驚いていると、そのまま強い揺れが始まった。抱き抱えられたまま移動しているのだと分かる。

「ローズ！」

「レディっ？」

後ろから自分を呼ぶ声を聞きながら、ローズは抵抗せずに自分を支える手にしがみついていた。

——すいません、と謝った声は、不思議なほどにローズの心を温かくした。

＊＊

「な……何故ここに」

使用人用の控室を開けるとエリザは、ローズをエスコートしていた使用人と話をしていた。大きな音を立てて開いた扉に振り返り、リジンを見て目を見開く。

「……エリザ！良かった、いた。私と一緒に来てくれ」

「は？え？ちょ……ツール！少し空けるわっ」

「——分かりました」

さすが使用人と言うべきか、ツールと呼ばれた彼はリジンの様子に一言も疑問を漏らさなかった。かなり驚いたようだったが、当然のようにエリザを見送っている。

彼もミュール家なのかな、と思いつつ、リジンはエリザを引っ張って歩いた。

適当に客室を見繕い、二人で入る。ソファを勧めれば、エリザは訝しげな顔でそこに座った。

「……あの、」

「エリザ！」

リジンが勢い込んで身を乗り出すと、それに合わせるようにエリザは僅かに後退した。

「君の力を借りたいんだ」

「……はい？」

エリザは目を丸くした。全くついていけない。とりあえず、彼女は焦りすぎて若干混乱しているリジンを落ち着かせ、事の次第を聞き出した。

「……つまり、まあ、エリザ。君なら何か打開策を持っているんじゃないかと思って」

「……………」

心底呆れた思いでエリザが溜息を吐くと、リジンはぎこちない笑みを浮かべて天井を仰いだ。落ち着くと、自分が支離滅裂な考えをしていたことに気が付いたらしい。

なぜエリザに会えば何とかなる、などと思ったのか。根拠が分からない。

「――端的に言わせていただきますと」

「あ、うん」

「無理ですね」

「……」

「……貴方のその、中途半端な決意と望みでは、無理です」

一度肩を落としたリジンは、しかし、続けられたエリザの言葉に顔を上げた。

「どういう意味かな？」

「分かりませんか？」

「……分からないと思う？」

――分かっている。エリザの言いたいことくらいは。

つまり、あれだけ騒ぎになったのを無理にローズと踊るということとは、一曲踊って終了、などということではないわけで。

ローズと踊りたいのなら、彼女をメフィス伯爵から奪うくらいの気持ちで臨めということだろう。

それほどの決意があるのかと問われれば、リジンはおいそれと頷けない。

一度ユリスが取り返しのつかないことをやらかしたのだ。次にリジンがそんなことをすれば、ウォルツ伯爵家は潰れるどころか殺される。

……大体、レディ・ローズがついてきてくれるかどうか。

「……。……そうだよ」

ボソリと呟かれた言葉。エリザがリジンを見た。

「私が全ての決意をして、レディは私の手を取ってくれるかどうか……」

「――正直認めたくありませんが、ローズお嬢様は少なからずリジンのことを意識しているかと。自覚はないと思いますが」

本当に認めたくなさそうな……つまり嫌そうなエリザの顔を見なかったことにして、リジンは頷いた。エリザの言うことは、恐らく正しいだろう。良くも悪くも、二人は常に近くにいるから。

「それに、ローズお嬢様が嫌がっておられるようでしたら、私が（貴方を）どうかしますから」

「……嫌がられたら諦める」

「ええ。ぜひそうなさって下さい」

少しお待ち下さい、と言い、エリザは立ち上がった。

一人になると、自分の気持ちをまとめやすくなる。本当に自分は、メフィス伯爵に逆らってまでローズといたいのか。

もちろん、ローズに好意は抱いている。このまま彼女に会って話し合う生活が続けば、早々にリジンはローズへの恋心を自覚していただろう。

心の動きに対して、環境の変化が早過ぎたのだ。

「……お待たせしました」

いきなり扉が開き、ビクリとリジンは身体を震わせた。

「あ……」

笑みを浮かべていない顔。エリザには、変なところばかり見せている。現に今だって、家族にすら見せたことのない不安に満ちあふれた表情を目撃された。

「リジン様。——マリッジブルーですか？」

神妙な顔で紡がれた言葉に、リジンは一拍置いてから硬直した。

「え」

「不安そうでしたので」

「……あれって男もなるのか？」

さあ、と首を傾げるエリザの手には、白いシートのような布。リジンがその用途を尋ねる前に、エリザからそれを教えてくれた。

「まずは、ローズお嬢様をホールから連れ去ってください。旦那様から引き離すのです。その際にこの布をお使いください」

私もローズお嬢様のため、出来る限りを尽くしましょう。

エリザが決意の目をしている前で、リジンは一人頭を抱えた。自分が、ローズに布を被せて逃走するところを想像すると。

——完全に、誘拐犯じゃないか。

＊＊

「あれ、リジン」

「――!?!」

静かにホール内に戻って、いきなり声をかけられた。慌てて相手の腕を引いて、壁に押し付ける。少し冷静になり、相手の顔を見た。ユリスだった。

「に、兄さん……」

「戻ってきたのか？お前も意外と度胸あんな。――ああ、いいいいよ。メフィス伯爵に見つからないように楽しくやろうぜ。何か食うか？」

使用人を呼び止めようとするユリスを全力で止めると、リジンは小声でローズを連れ去る旨を伝えた。案の定、ユリスは呆気にとられたようだった。

「お前、そんなことしたら――」

「多分……メフィス伯爵から制裁が下されると思う」

「最悪、家潰れんぞ!」

今回はエリザも共犯だし、罰の軽減はない。ユリスの手は、弟を止めるようにリジンの腕を掴んでいた。

「考えなおせ。分が悪すぎる。今じゃなくても良いだろう？協力するから、もっと長期戦でいこ……」

ユリスが、ふと横を見た。つられてリジンもそちらを見て、目を

見開く。

「……私は、私の意思でリジン様と踊ろうとしていたのです」

——レディ。

トニーやメフィス伯爵を見つめ、毅然と立っている女性。美しく優しい天使というより、美しくて強い、まるで野に咲く薔薇のような。

マリッジブルー（？）も吹き飛んだ。彼女を求めることに、もう何の不安も躊躇もない。ユリスに腕を捕まれていなかったら、彼女に走り寄って笑いかけたい。

ぼんやりと兄弟でローズを見つめていた。
あんなにも、彼女は美しかっただろうか。

「……お願い、します。リジン様と、踊らせてください……っ」

ユリスの手は、緩んでいた。無意識に兄の手を振り払い、リジンは床を蹴る。彼女の名を呼び、抱きしめたい。

驚いた様子の紳士淑女の間をすり抜け、ローズの後ろに立つ。

「すいません、レディ」

彼女が振り向く前に布を被せると、一度ウォルツ伯爵邸でしたように抱き上げた。

「え？……えっ？」

暴れたりほしないものの、疑問を込めた声が聞こえてくる。
視線を感じてそちらを見れば、メフィス伯爵が睨んでいた。他にも、顔を土気色にしてウォルツ伯爵が卒倒し、ユリスが頭を抱え、

スティーブンが壁に背を付けてリジンに向かって手を振ってくる。いくら体重が軽くとも、その抱え方は腕にかかる負担が大きい。出口に向かって駆け出すと、皆がその異様な空気に道を開けた。

途中、扉が開くとエリザが入室した。すれ違いざまに、リジンと目が合う。

「後は、お任せください」

彼女の唇がそう動いた気がして、それに応えるように笑うと、ローズを抱えたままリジンはホールを出た。

ボタン、と重い音を響かせてしまる扉に、どうしようもない喜びを覚えた。

「リ、リジン様——っ！」

「あ、すいません。もう少しの間我慢してください」

誰が追いかけてくるかも分からない。エリザと話し合った客室に入ってソファにローズを横たえ、扉に鍵をかけたところでようやくリジンは一息つけた。

「大丈夫ですか？レディ」

布を剥がすと、頬を赤くしたローズが酸素を求めるように唇を開いて深呼吸した。

「リジン、様……！」

「いきなり、すいません。不愉快な思いをさせてしまって」

しばらくローズは瞬きしたり部屋を見渡したりしていたが、リジンの顔を見ると、ニコリと微笑んだ。

「いいえ、リジン様。貴方と話せて嬉しいです」

「レディ……」

「……ごめんなさい。リジン様が出て行かれたのは、私の責任です。私が、お父様に言っていなかったから……あの日、約束したのに」

睫毛を伏せ、申し訳なさそうに肩を落とすローズを単純に可愛いと思った。欲求に従い、包み込むように抱き寄せると、ローズは目を丸くした。

「大丈夫ですよ。だって、これから踊ってくださるでしょう？」

「もちろんです」

ローズの細い腕が自分の背に回されるのを感じて、リジンは彼女を抱きしめる力を強めた。

伯爵の約束

＊＊

「ここを開けろッ」

「リジン！開けるんだ！」

どれだけの間、抱きしめ合っていただろう。乱暴に扉が叩かれる音で、リジンは顔を上げた。何度も金属がぶつかり合う音がする。鍵をかけていて正解だった。

「……リジン様」

「レディ、私は、貴女と離れるつもりはありません。——構いませんか？」

「はい……！」

結われた髪が解けない程度に撫で、リジンはローズから離れた。腕の中にあつた温もりがなくなり、寒さを感じる。

早足で扉に近づき、こちらから叩き返したら、一瞬だけ向こうの反応がなくなり、すぐに再開された。

「リジン！お前は本当に、……何ということをして……！」

「……今開けます」

顔を土気色にしたウォルツ伯爵が転がり込んできた。メフィス伯爵が後に続き、その後ろには真っ青なユリスが。

彼らの視線から守るように、リジンはソファに座るローズの前に立った。

「メフィス伯爵。お話があります」

「——私は君に話などない。行こう、ローズ。母様とエリザが向こうで待ってる」

メフィス伯爵がローズに近づいた。ローズは実の父親を怖がるように身を竦ませる。リジンはずっと伯爵の前に出る。

「伯爵！！レディ・ローズを幸せにします。結婚させてください」
「……リジン様っ？」

何故か、驚いたのはローズだけだった。顔を真っ赤にして照れた様子でリジンを見つめる。

メフィス伯爵が頬をひきつらせた。

＊＊

エリザの合図に、リジンは微かに笑うことで応えてくれた。

——あの方に、ローズお嬢様を任せて、お嬢様は幸せになるかしら。

なる、と思った。リジンと話をした時には、それを確信した。今だってそう思っている。

——ローズお嬢様が幸せになる、のに。

自分も、ローズの父親と同じ。ただ、彼女が愛する人を見つけてしまうことに不安を感じている。

——ローズお嬢様のことを一番に考えなきゃ。

第二王妃に仕えていた、マリア侍女長を見習って。

「……奥様」

激怒している伯爵が、王城の使用人に搜索を命じていた。その横で不思議そうにしているメフィス伯爵夫人に声をかける。

「——あら、エリザ。……どうしたの？ ねえ貴女、今の見た？」

「奥様に、お話したいことがございます。よろしいでしょうか？」

いつになく真剣な顔をしたエリザを見つめると、伯爵夫人はエリザの手を引いて壁際に向かった。メイドからドリンクを受け取ると、それをエリザに渡す。

「……どうぞ、エリザ」

「え、ですが……」

「で？ 何の話なの？ ——ローズのことでしょうか？」

ウォルツ伯爵がメフィス伯爵に早足で近づき、平謝りし始めた。その横にはユリスがいて、ただただ二人して謝り倒している。

「——リジン様は、ローズお嬢様との婚儀を望んでおられています」

ふうん、と伯爵夫人は頷き、続きを促す。

「旦那様は、それに反対していらっしゃいます。私は、リジン様ならば、ローズお嬢様をお幸せにしてくれると、そう思いました。勘だと言われたらそれまでです。ですが……どうか、お願いします、旦那様の説得に、手をお貸しただけでないでしょうか……！」

「本当に、あの子が幸せになれると思うのね？」

ローズとリジンの居場所が分かったのか、メフィス伯爵とウォルツ伯爵、ユリスが、駆け足でホールを出た。ザワザワとホール内が騒がしい。

「はい。確信しました。今は心許ない絆ですが、あのお二人ならば絶対に幸せになれます」

ドリンクのグラスを持ったまま熱く語るエリザに、伯爵夫人は微笑んだ。ローズやルーシヤンと似た、まるで天使のような微笑み。

「そうね。行きましょう。知りたいことも知れたし、あの人にも強く言わなきゃ駄目ね」

「え……？」

「ほら、行くわよ、エリザ！早くローズとリジン殿を見つけなくちゃ！」

「は、はい……！」

ドレスを持ち上げて走り出した夫人に、慌ててエリザもついていった。

＊＊

「け、結婚って……！あ、あの。その、」

ウォルツ伯爵が、真っ青に。ローズが真っ赤に。

「リジン……っ！約束はもう無くなったんだ。頼むから余計なことはしないでくれ！！」

リジンを押しのけ、伯爵がローズの腕を掴む。そのまま部屋を出て行こうとして。

「——貴方、いい加減になさい」

カツン。ヒール音がした。

そこに立つのは、ローズに色気を足したような美貌の女性。そして、メフィス伯爵がローズを溺愛する理由にもなっている人。

リジンも何度も舞踏会などで見たことがある。しかし、ローズと結婚したい、と望むようになって改めて見れば、ずいぶんと印象が違ふ。

——というか、なんか怒ってる？

気のせいかとも思ったが、メフィス伯爵が黙り込んで目を逸らしているところを見ると、それは正しいらしい。

「……エリザ。言ったのか」

ジロリと睨まれ、エリザが身を竦めた。

「申し訳ございません」

「あら、エリザに責められるイワレはないわ」

どういう状況？とローズに目を合わせると、彼女もリジンを見返して分かりません、と囁いた。

「でも……お母様は、いつも私達の味方をしてくれますから」

「良い方向に流れているの……か？」

「ええ。きっと」

夫人はウォルツ伯爵に近寄ると、彼の土気色の顔色に微笑を漏らすと、軽く頭を下げた。

「約束通り、リジン殿を、次期メフィス伯爵としますわ。よろしいですね、ウォルツ伯爵」

「あ、……はい」

「ちょ、勝手に……っ」

止めようと肩を掴む夫にも、夫人は微笑んだ。

「貴方の言う通りにしたら、いつまで経ってもローズが結婚できないわ。いいわね？」

「……」

「これは、兼ねてからの約束だったでしょう」

「あの、」

「約束」を繰り返し主張するメフィス伯爵夫人に、ユリスが恐る恐る声をかけた。

「約束、とは？」

「え？ あら、知らないの？」

知っていたかと思ってたわ。夫人は一人可笑しそうに笑った。未だ肩を掴むメフィス伯爵の手を払い落とす。

「この人……メフィス伯爵と、ウォルツ伯爵間で結ばれた約束。――リジン殿と、ローズの婚約よ」

……。
……。

「「ええっ!？」」

ローズ、リジン、ユリスの声が揃った。

「約束は破棄されたんだ!もうその約束は無効になった」

「二人が結婚したいって言ってるのよ?別に良いじゃない。何が問題なの?家柄だって問題ないわ。大体、貴方一度は許可したのよ?」
「~~~~!!そもそも、ローズに結婚はまだ早い!」

とうとう本音が出たメフィス伯爵に、伯爵夫人が大声で叱り付けた。

「貴方!いい加減になさい。みっともないっ!」

ウォルツ伯爵は、ポカンと夫婦喧嘩を見つめていた。

＊＊

メフィス伯爵が夫人に引きずられていき、ユリスとウォルツ伯爵がのろのろホールに戻っていった。

ソファに座ったりリジンはエリザに手を差し出した。戸惑ったように、彼女も手を出して握る。

「感謝するよ、エリザ」

「いえ。……ローズお嬢様、おめでとうございます」

「ありがとう」

ローズの肩を引き寄せて、リジンは照れ臭そうに笑う。ローズも頬を赤くして笑った。

「驚きました。約束が婚約話だったのかと考えたことはありませんが、ユリス様かと思っていましたから」

「私입니다」

ユリス本人が、ローズを……というよりメフィス伯爵位を狙っていたから。

「……では、そろそろ行きましょう」

三人でしばらく話していると、ローズが立ち上がった。もう少しここにいていいのでは、と思っていたリジンは、眉を下げた。

「ふふ。リジン様、踊りましょう？」

ローズの言葉に蕩けるような笑みを見せたリジンに、エリザは内心苦笑した。

……将来、リジン様は旦那様に似るかもしれない。

「レディ！」

「よ、リジン！」

ローズが戻ると、トニーとステイブンが声をかけてきた。ローズに駆け寄るトニーに、リジンはムツと不機嫌になった。

「大丈夫でしたか、レディ!？」

「心配してくださってありがとうございます。トニー殿」

笑顔を浮かべてお礼を言うのはローズでなくリジンだ。

「……リジン殿に言ってます」

「いえいえ。(未来の)妻を心配してくださって。感謝しますよ」

「っ、妻!？」

「へえ。良かったな、リジン」

ローズの手を引いて、リジンはホールの中心に向かった。彼女の腰に手を起き、手を取って踊りはじめる。

隣で踊っていたメフィス伯爵夫人が笑顔でリジンを見た。こちらも笑い返す。

「やっと踊れましたね、レディ」

「リジン様。ローズと呼んでくださって、構いませんよ……?」

夢の中のように、身体中がふわふわしたようだった。

満面の笑みを浮かべながら踊っていたローズは、ふとトニーを見た。

「あ」

「どうなさいました?」

「そう、私、トニー様のおかげで気付いたのです」

トニー殿ですか、と低くなる声を抑える。ローズが嬉しそうだし、

こちらが不機嫌になるのも悪いだろう。

「以前、リジン様が私に、優しいと言われるのが嫌なのだと教えていただきましたよね」

「ええ。エリザが屋敷に怒鳴り込んできた日ですね。レ：ローズは優しいと思いますけど、言わないように気をつけます」

「あ、あれ、違ったんです！勘違いでした」

「……勘違い？」

そうなんです、と可愛らしく頷くローズを見る。あんなに嫌そうだったのに、どこが勘違いなのか。

「だって私、ルーちゃんとかエリザに言われても、嫌じゃないんです。もちろん、リジン様にも」

「そ、そうなんですか？私にも？」

「はい」

家族と同じ扱いに喜んだら、くすくすと笑ってローズがターンした。話をしながらも踊る姿は華麗だ。

「私、トニー様と話をしていて、何も知らないくせにって思ったんです。何も知らないくせに、私やリジン様のことを知ったように言っ
って」

トニーは何を言ったのだろう。壁際に立つトニーは、リジンに見られているのにも気付かずぼーっとローズを見ている。見てんじゃないよ、と思うリジンは狭量なのだろうか。

「その時に気付いたんです。私が嫌なのは優しいと言われることでなく、何も知らないのに噂だけで私のことを言われることなんだ

って」

私の全てを知って、なおも優しいと言ってくれるのは嬉しいです。晴れ晴れとした様子のローズ。

演奏が終わり、一瞬だけ音楽のない時間ができた。

「私はローズのことを優しいと言ってもいいんですよ」
「もちろんです。言われると嬉しく思いますわ」

素早くトニーを見る。彼は未だにローズを見ていた。

「ローズ、いくら優しくとも、」

——きちんと用心してくださいね。私以外の男のことを。

そう言って、リジンはローズにキスをした。

伯爵の約束（後書き）

ローズは恋愛結婚でした…！

ローズは、と言いますか。ルーシャンも恋愛結婚になると思います
が。

初めて連載物を完結できました。良かったです。

最後に、ここまで読んでいただいて、ありがとうございました！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7485r/>

令嬢と令息の憂鬱

2011年3月23日22時04分発行